
集める人

ユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

集める人

【Nコード】

N2702W

【作者名】

ユキ

【あらすじ】

それは、世界のどこかで起きているかもしれない物語。ありふれた、どこにでもありそうな日常の、影。

それは酷く救いようない時もあれば、希望に満ち溢れている時もある。

けれど、結局は誰にも知られないで、静かに結末を迎えている。ニユースに流れるのは、結末とも言えない物語の名残。

美しく、汚らわしくて、醜くて、素晴らしいそれは、

今日も世界のどこかで、紡がれている。

彼女は、それを集める。

それが、集める人。

それが、この物語。

pixivで投稿させて頂いてる作品です。色々と修正を加えてから投稿しています、

(<http://www.pixiv.net/member.php?id=2859998>)

序章（前書き）

序章にもならない、些細なこと

序章

10年前、私は死んだ。

8月の、何も変哲のない夏の日だった。

私こと本堂ほんどう語は、とある避暑地へと遊びに来ていた。

当時7歳だった私は、今の私よりずっと活発的で、周囲の自然をこれでもかと満喫したものだ。今の私だったら、静かに室内で本を読むに違いない。

と、そんな活発で愛想もあつた当時の私は、家に帰る前日・・・まあ、最終日だ。最終日にあるものを発見した。

——別荘の裏の倉庫。それだった。

別になんてことはない。ただの倉庫だ。それ以上でもそれ以下でもない。けれど、子供と言うのはそう言う何でもないものにも非常を感じれるものなのである。

全く使われず真っ暗なその倉庫の中は、子ども心からはまるで異世界のようだった。

早速中へと入った私は、扉の隙間から漏れる光を頼りに、散策をする。一応、何もないとは分かっていたが、それでもついつい奥へと進んでしまった。

とてつもなく狭い異世界の冒険は、とても心が躍つたと覚えている。

そんな小さな冒険を始めてから約1分。私は奥に何かを発見した。その何かは既に私気付いていたようで、私が気付くや否やこちらに向かって来た。

手には、一本のナイフ。

そして、それを何も理解出来ずに立ちすくむ私に、その「何か」は振りかした。

——死。

それだけが、暗闇しかない倉庫に残った。

見つけたのは、最近避暑地があつた地域で話題になっていた連続殺人犯だった。今はもう逮捕されたらしいが、当時は逃走中で偶々倉庫に逃げ込んでいたらしい。それを私が見つけてしまったから、殺された。それが、真実。

たったそれだけの、些細な事実。

10年前、私は死んだ。

8月の、何も変哲のない夏の日。

けれど私は生きている。この世に存在し、息をしている。でも、私は“人”ではない。それとは違う、別の存在。

——集める人。

これが、今の私の存在だ。

朝。
7：30。

私は、学校へ向かう準備を始める。

第一話　ありふれたこと（前書き）

日常は幾千。けれど、それは揺るぎなき“ありふれたもの”
その何でもないものから見出す、日常と非日常

それが、物語

第一話　ありふれたこと

大通りから外れた人通りの少ない道。朝7：45に、私はそこを通る。

実はこの道、学校へ行くにはどうしても遠回りになる通路なのだが、私はいつも通ることになっている。

はつきり言おう。特に理由はない。ないけど、何となくいつも通ってしまうのだ。まるでそこを通らなければ、今日一日が始まらないみたいに感じてしまう。

私は、こう言う現象を“日常の中の日常”と呼んでいる。

日常とは“自分から見ても他人から見ても、ありえると感じる時の流れ”だ。起きて、食べて、出かけて、帰って、食べて、お風呂へ入って、寝る。こんなのは、よくある一日の流れだろう。ありふれた“日常”だ。

生きていれば自然に出来る“流れ”。それを私は、日常と定義している。

無論、それは生きる場所によって変化する。そのありふれた“日常”を送れないと言う“日常”もあるのだ。“流れ”は自然に出来るが、その先にあるものは変化していくのである。

私にとって、そしてその周囲にとっての日常が、そう言うものと言っただけだ。

そんな“流れ”、“日常”は、さきに言っただ通り自分で作らなくても出来るものだ。

けれど、“日常の中の日常”は、自分で作る必要がある。ありふれた中に作る自分だけのありふれたもの。それが“日常の中の日常”

”。分かりやすく言えば、日常の中に自分だけの当たり前こと、つまり日課を作ることだ。

ここまで言えばご理解出来ただろう。そう、言ってしまうえば、“日課”のことだったのだ。何のことはない。

しかし、厳密に言うとは違う。日課と言うのは、ほとんどの場合意味があつてやるものだからだ。

対して、“日常の中の日常”はほとんどの場合意味がない。または一見意味がなさそうなものだ。

また、日課は日常的だ。誰の目から見てもありふれたことを行うことが多いだろう。けど、“日常の中の日常”は、例えばそれが誰の目から見てもおかしい行為でも当たり前とする。

どんなに非日常的でも、その人からすれば日常なのだ。それが、“日常の中の日常”。

例えばどんなに意味がなさそうでも。

例えばどんなに非日常でも。

それが日常なら、“日常の中の日常”。

今日も私は、意味もなくこの道を通つてみる。

学校へ着いた。今日も今日とて暇なものだ。

周囲のクラスメイトは友達同士で楽しく会話をしているが、私にはそんな仲の良い者はいない。別に嫌われているわけではないが、好かれてもない。無関心の領域だろう。

それは、まあ、私だつて友達は欲しい。けど、上手く出来ないからこうなっているのだ。

…大丈夫、寂しくなんかはない。ないっただけ。いつも通り、

本でも読むとし――

「お、本堂。おはよう」

「!？」

ようとしたのだが、不意に話し掛けられて中断してしまう。思わず体がビクツ!となつてしまった。

話し掛けてきた相手は、私のクラスメイトだった(当然か)。名前を、杉野^{すぎの}時則^{ときのり}と言う。ありがちなショートヘアに、イケメンと言えなくもないルックス。半袖のYシャツで露出してる腕は、いかにも体育出来そうに引き締まっている。

もし、彼のことを簡単に説明するならば、典型的な「良い人」と言えば十分だろう。それだけで事足りるほどだ。誰であろうと分け隔てなく接し、打ち解ける。女子からも男子からも人気がある存在だ。交友関係はこのクラスでは納まりきれないほどだ。

そんな彼は、もちろん私でも他のクラスメイトと全く変化がない接し方だ。他のみんなは、どこか一歩下がった雰囲気で接してくるのに。

「おう、どうしたんだよそんなに慌てて」

「べ、別に何でもないわよ。お、おは…よ…」

「ちゃんとこっち向いて挨拶しろよおい」

完全にそっぽを向いて挨拶をしていた。確かに失礼極まりないが、目が合わせられないのだからしょうがない。

けれど、本人は言葉の割にあまり気にしていないようだ。特に不機嫌な様子はなく、私の本に視線を向けている。

「何の本読もうとしたんだ？」

「……こ、これ」

「ん？ラノベか。こう言うのも読むんだな」

「え、ええ。そこに物語があるなら、何でも読むわ…」

「へえ。何か格好良いな」

邪気のない笑顔を見せる杉野君。普通なら馬鹿にされてる思うが、彼は心の底から言っているのだろつ。そつ、彼は本当に良い人なの

だ。それは、痛いほど良く分かる。今時こう言う人も珍しい。

……だけど、私は彼が苦手だ。嫌いじゃないけど、苦手なのだ。私なんかに話しかけてくれるのは嬉しいし、鬱陶しいとも思わない。

……けれど、苦手なのだ。

「……ね、ねえ」

「ん？何だ？」

「な、何でいつも、私に話しかけてくるの？」

待て。いきなり何を聞いているのか、私よ。流れるにおかしいだろう。

しまったと思ったが、もう遅かった。杉野君は完全に思慮に入る顔をしてしまっている。

「うーん、何でって言われてもな……」

「ご、ごめんなさい！今は、忘れて……」

「いや、良いけどさ。まあ、俺も良く分かんないんだよ」

「え……？そ、そうなの？」

意外な言葉。と言うか、予想だになかった言葉、と言うのか。とにかく杉野君のその言葉に、私は思わず反応した。

私と話している理由が、分からない……？私はてっきり、「一人で寂しそうだから」とか言う「放って置けよ」とでも言いたくなるものかと思っていた。

けど、そうではないらしい。彼は彼にも分からない、違う「理由」で話し掛けていると言う事なのか。

「単純なように難解な理由って言うかさ。とにかくよく分からん。何となく、本堂と話するのが日課になってる感じがな」

「……日課」

「そう、日課。……あ、悪い！何か、言い方悪かったか？」

「う、ううん。大丈夫」

何だろう。それは多分、日課じゃない気がした。

だって、意味がなさそうだけど、繰り返しているもの。それはまるで、アレのようじゃないか。

「日常の中の、日常……」

彼にとっては、私と話すことがそれなのだろうか。

しかし、それを確かめようとする前に、彼は他のクラスメイトに呼ばれて行ってしまった。いや、元から確かめようはないだろう。

この考えは、あくまで私が考えたものだ。他人にはまず伝わらない。

結局、私は少し妙な気分のまま、仕方なく読書へと戻るのだった。

第二話 二人 (前書き)

彼女の見る彼
彼の見る彼女

第二話　二人

お昼休み。私が静かに本を読んでいると、また彼が話しかけてきた。

「なあ、本堂」

「……………何？」

私は、なるべく本から目を逸らさないように対応した。目を合わせないようだ。

いや、別に他人と目を合わせるのが苦手なのではない。彼と目を合わせるのが苦手なだけだ。

「最近広まってるあの噂、知ってるか？」

「そうね。聞かないからには判断できないわ」

「ほら、裏山のさ、変わった女の人の噂なんだけど…」

「……………知らないわ。どんな噂なの？」

「何か、毎日そこで空を見上げてるらしいぞ。しかも長時間」

「……………そう」

「あ、あー、興味ないか？」

「うつん。ありがとう、興味深い話しが聞けたわ」

ありがとうの部分だけ、彼の方を向いた。私なりの、誠意の表し方だ。これでも結構精神力を使っている。いや、本当に。

それにしても、なかなか気になる話だ。その人も、アレを持っていると言っのだろうか？毎日空を見上げるなんて、一見何の意味もないような気がするが…。

「そっか。良かった良かった。いやー、しかし暑いな」

「……………そうね。もう、7月中旬だもの」

「夏休みもうすぐだな。楽しみだ」

確かに、夏休みまでもう一週間を切っている。私は別に、楽しみじゃないけど。

……………だって、遊ぶ友達も居ないし、出かける予定だってないし。

あるとしたら、図書館で本を読んだり宿題をしたりするくらいだろうか。

一応、土日は必ず出掛けたりしているが、夏休みではいつでも土日みたいなものだ。どうしたものだろう。毎日出掛けることに辟易を禁じざるを得ないと言っわけではないが、どちらかと言えばインドアの私にはあまり好ましいことではない。どうせだったら、家でゆっくりしたいものだ。

けど、それではちょっとアレであり、不健康だ。…うーん、何か、杉野君のせいで無駄な悩みが生まれつつあるような…。それはいくらなんでも責任転嫁だろうか。

これはまた、別の機会に考えよう。私は半ば現実逃避気味に、窓の外を眺めながらそう結論付けた。

「……………」

「ん？外に何か居るのか？」

「いいえ、別に。何となく眺めただけ」

「おう、そうか」

何だか虚しくなって、ついでに逃避も加えて空を見てしまったとは言えない。

ああ、それにしても、ずいぶんと限らない晴天だ。太陽も、今日も元気に私たちを焼き尽くそうとしている。蝉の声はまだ聴こえないが、鳴きだす頃にはきっと夏休みの真っ只中だろう。

果たして、噂の女性とやらはこの夏の空の下で空を見上げているのだろうか？もし熱中症で倒れてたら、笑えない。裏山なんて言う見つけ辛い場所で倒れてしまっっては、命に関わるだろう。

「大丈夫かしら……………」

「は？何だいきなり」

「あつ、う、ううん。何でもないわ……………」

「？、そうか」

……………何で私は今、見ず知らずの女性の心配をしてしまったのだろうか。意味が分からない。

まあ、良い。きっと杉野君のせいだろう。そう言う事にしておこう。さつきからあらぬ罪を被ってばかりであるが、気付いてないのだから別に良いだろう。

「ちなみに、その女の人っていくつくらいなの？」

「さあ？そこまでは知らないな。気になるなら、実際に見にいったら良いんじゃないか？」

「そうね…。そうするわ」

「あ、マジで行くんだな…」

何でか意外そうな顔をされた。どうやら、彼の目からの私は、あまり能動的な人間には見えていなかったらしい。うむ、当たり前だ。その通り、私はそこまで積極的な性格ではない。むしろ消極的な方だろう。さつきも言ったが、典型的なほどインドアな人間なのだ、私は。暇さえあれば家で本を読んでいる。

……けど、今回の場合は話が別だ。空を見上げる不思議な女性、いかにも“物語”の匂いにする。

——今回も集められるだろうか？その“物語”を。

放課後。

友達も居なければ部活にも入っていない私は、当然一人で下校している。

と、言いつつ、実は一度杉野君と一緒に帰ろうと言われたことがある。そして、断った。それ以来誘いはない。

別に嫌ではなかったのだが、悩んだ拳句の結果だった。許せ、杉野君。そもそも、私を誘う意味が分からなかった。よりによって、何で私なのか。

さて、いつもならあの道を通って真っ直ぐに家に帰るのだが、今回は違う。

何故なら、例の女の人に会うため、裏山へと足を運ぶつもりだからだ。山登りは疲れそうだが、気にしない方向でいきたい。いくらインドアでも、それなりの体力はあるつもりだ。と言うより、今の私の“存在”は、そんなことを気にする必要はない。

だから、そこは問題ではないのだ、あるとすれば、一つだけ。それは、単純にして難解だ。

「……裏山の、どこにいるのかしら」

そう、それこそが唯一無二にして、かつ重要な問題だった。まさか当てずっぽうと言うわけにはいかないし、困った……。こう言う時に、友達がいればなと思う。そうすれば、聞いて解決なのだが。

「やっぱり、真っ直ぐ帰った方が……」

「お、本堂。まだ帰ってなかったのか？」

「きゃっ、す、杉野君!？」

今回は大人しく帰ろうかと思っていた矢先、不意に帰ったと思っていた杉野君に声をかけられた。帰ってなかったのだった。それはこっちのセリフだ。何でまだ教室に？さっき出たのを確認したのに……。お陰で軽く心臓に負担がかかった。

結局、話を聞けばただの忘れ物だったらしい。うん、実に単純明快でむしろイラッとした。カルシウムが足りない。牛乳でも飲みたいが、前に牛乳を飲んでいたら『本堂さんが胸大きいのって、もしかして牛乳が好きだからなの?』とクラスメイトに言われ、以来苦手となってしまっている。何でそう言う時に限って話しかけてくるのか……。対応にも困ったし、『さ、さあ……?どうかしら』と言葉を濁すしかなかった。

何か、杉野君のせいでも良いトラウマを思い出してしまった。思わず恨みたくなってくる。

「ん?どうしたんだよ、怖い目して」

「別に、何でもないわ……」

「そうか。ああ、そう言えば、本当に裏山行くのか?本堂は」

「ええ。でも、裏山のどこにいるか分からないし、やっぱりやめよ

うかと思つてて……」

「そうなのか。あ、じゃあ、俺が案内してやろつか？」

「場所、知ってるの？」

「一度誘われて見にいったんだよ。その時は、誰も居なかったけどな」

成程。これはぜひとも、ご好意にあやかりたい。一緒に帰るわけでもないし、丁度良いだろう。渡りに船とはまさにこのことだ。罪をこつそり被せたり、危うく恨みかけたりしたのに良いのだろうか。いや、良いに違いない。

「じゃあ、ぜひともお願いするわ。よろしくね」

「おう。じゃあ、行くか」

と言うことで、私は杉野君の案内で裏山に登ることにした。裏山は学校の近くにあり、歩いてすぐの距離だ。まずはそこまで、一緒に歩く。

しかし、杉野君と肩並べて歩く日が来ようとは……。うん、意外と悪くないかもしれない……。

「ん？何か顔赤くないか？」

「そう、ね……。男の人と一緒に歩くの、初めてだから……」

「そうか。あー、実は俺も、女子と一緒に歩くの初めてなんだよな」

「そうなの？意外ね……」

「ん？そうか？」

「ええ」

だつて、てつきり私は、今まで何度も女子と帰つてると思っていた。一応、モテてるし。バレンタインデーとか糖尿病にさせたいのかと言いたくなるくらいチョコを貰っていた。流石人気者である。

しかし、そうなると彼女とかもないのだろうか？ちよつと尋ねてみようかと思つたけど、何だか馬鹿らしいのでやめておいた。何で私がそんなことを気にならなければいけないのか。

「けどさ、前は断られたけど、今回は了解してくれたな。どう言う風の吹き回しだ？」

「そうね……。今回は利益があるからかしら。前は得がなかったですよ」

「…………泣くぞ、俺」

私の率直な返答に、項垂れる杉野君。だって、それが本音なのだから仕方ない。

…………けれど、こんなに悪くないものなら、あの時断らなければ良かったかもしれないと思う。口には出さないけど、私はちょっと後悔をした。絶対に口には出さないけど。

——もしまたお誘いがあれば、その時はぜひ承諾させて貰おう。

第三話　水色ともう一つ（前書き）

——知らないままで良い。望むことは罪だから

これは、とある夏の物語

第三話　水色ともう一つ

——裏山のとある崖で、いつも空を見上げている女性が居る。

そんな噂を、俺、藤川^{ふじかわ} 新^{あらた}が聞いたのは、ほんの一カ月ほど前の事だ。

今では校内限定とは言えそれなりに広まっているこの噂だが、当時はまだあまり有名ではなかったようだ。

正直、あまりこう言う噂などには興味を示さないタイプだったが、不思議なことに、この噂には妙に心を惹かれたものだ。何故か、どうしてもこの目でその女性を確かめたくなり、ついには友人に詳細を訪ね、流布の根源である先輩からその女性の居る場所を聞き出したほどである。俺の性格から考えるとかなり行動的と言えた。

早速その日の放課後に裏山へと向かい、教えられたとおりに歩にくい山道を進んでいく。そして、しばらくすると不自然に葉が落ちている茂みを見つけ、そこが先輩に教えられた目印だと気づいた。あとは、ここを通ってまっすぐ歩けば良いだけだ。俺はそのまま歩き続け、ようやく木々しか見えなかった視界が開き、言われた通り崖へと辿りついた。

すると、そこには町の景色が一望でき、空がどこまでも続いている光景が広がっていた。そして、その時の空はどこまでも青く、白雲がゆっくり泳いでいたのを覚えている。それはとても平凡的で、限りなく美しかった。

しかし、そんな光景より美しいものが、その空の下にはあった。いや、居た。黒髪のロングヘアに、白い清楚なワンピースを着た、一人の女性だった。後姿だけでもその美しさは良く分かり、そんな彼女がこんな崖に居ると言うことが、とんでもないアンバランスを生み出していた。

それだけでも充分驚きだったが、もう一つ驚いたことがあった。

それは、女性が本当に空を見上げていたことだ。噂に興味があつたとは言え、はっきり言つて半信半疑だつた身としては驚き以外の感情を隠せない。首、疲れないのか？とか、そんなどうでも良いことは思いつかないほどに。

俺はしばらくその光景に息を飲んでいたが、我に返り、そつと彼女に近づいて横顔を確認してみる。

「……………おお」

やはり、美人だつた。どこか儚げで、穏やかな表情が印象的であり、思わず感嘆の声が漏れてしまった。

と、そんな感じで噂の女性に見蕩れていると、

「……………えつと、何か御用？」

「……」

不意に、女性がこつちを向いて話しかけてきた。それもそうだ。

横に居てじつと見つめられていたら、嫌でも気になる。ただ、その時の俺はそんなことを考える暇もなく、驚きの言葉を発したまま完全に思考停止させてしまっていた。何とか言葉を出そうとするが、上手く口が動かない。

「あ、いや、その、えつと……………。実は、あの、こ、ここにいつも空を見てる人が居るって聞いて、それで、その、み、見に来たと言いますか、何と言いますか……………。そしたら、本当に居て、しかも美人で……………あつ」

それでも喋ろうとした結果、テンパリ過ぎて言葉の呂律が回らないどころかついつい余計なことまで言つてしまった。ここまでくるとパニックを通り越して無に近い状態になり、冷や汗つて本当に体が寒くなるんだな、と冷静に思えるまでになっていた。多分、顔面蒼白だっただろう。

ただ、そんな俺を見ても、女性は少しも怪訝そうな表情していなかった。どうやら、美人なのは表面だけではないようで、心の方も澄み渡っているらしい。あと、どうでも良いが、正面から見るとより顔の整い方が尋常じゃないことに気付ける。歳は20歳かそれく

らに見えるが、実際のところはどうか。

「あら、そうだったの。近くの高校の子？」

「あ、はい。えっと、藤川って言います。藤川 新」

「藤川君、ね。私は水寺^{みずでら} 奏^{かなで}。一応、これでも不審者じゃないのよ？」

「いや、まあ、それは何となく」

と言うか、不審者として見る方が難しい。確かに、こんな所で空を見上げていると言う行為は普通じゃないが、この人自身の雰囲気はとても不審者とはほど遠いものだった。先入観に捕らわれ過ぎだとは思うが、はつきり言ってしまう。それくらい美人なのだ。

そもそも、空を見上げていることが誰かの迷惑になるとは思えないし、別に良い気がするが。尚且つ、こんな所には普通人も来ないだろう。来るのは、俺みたいな興味本位で噂を確かめに行ってみた奴くらいだ。

「そう？ありがとう。それにしても、私を見に来た人は今までも数人居たけれど、話し掛けてきたのは藤川君が初めてね」

「あれ、そうなんですか？」

「ええ。みんな、気味悪がつて帰っちゃうみたいね」

そうなのか……。ただ、確かに奇行だとは思うが、君が悪いとまではいかない気がする。まあ、そんなことを言ってもしょうがないか。そんな人に話しかけた俺も、また変わり者ってことなのだろう。いや、普通だと思っけどさ。本^{ラノベ}を読むのが好きな、どこにでもいる高校生……だと思う。

「それにしても、何でこんなことしてるんですか？意味があるようには思えません」

「さあ、何ででしょうね」

「えーっと……。つまり、秘密ってことですか？」

「そうねえ。単に話すと長くなるからってことで良いかしら？」

そう言っつて、水寺さんは悪戯に微笑んだ。それは、とても可愛ら

しくて、けど、どこか切なげだった。

結局、水寺さんはその後、再び空を見上げだしてしまった。別に会話を拒否しているような雰囲気ではなかったが、これ以上邪魔をするのもアレだと思い、俺は一礼してからその場を去った。

——その日から、俺は水寺さんの下に通うのが日課となった。

何故そうするようになったかは分からない。けど、俺はその次の日にも、自然とそちらに足が向いていた。

そう何度も通うと、流石にいつか嫌がられるんじゃないかとは思っていたが、不思議なことにそんなことはなかった。俺が来るたびに、水寺さんは挨拶をしてくれ、その後、静かに空を見上げ続ける。そんな放課後。

特に会話があるわけではないのだが、不思議と居心地は悪くない。空を見上げ続ける水寺さんの近くに座って、本を読む。それだけ充分だった。

一応、時々会話をする時もあるが、大したことは話していない。学校はどうだったとか、好きなものとか、そのくらいだ。水寺さん自身のことを質問しても、ほとんど答えてくれないことは分かっている。聞いたところで、やんわりと回答を断られるだけだ。

また、水寺さんの言う通り、俺以外にも興味本位で水寺さんを見に来た奴は居た。けど、全員水寺さんのその行動に理解を示さず、二度と来ることはなかった。時々クラスメイトが来たりするが、人が来るたびに隠れているので、俺が水寺さんの下に通っていることはバレていない。あまり厄介なことになるのは勘弁だ。

と、そんな感じで、俺は放課後に水寺さんと過ごすのが毎日の日課となっているわけだ。ただし、決まって金曜日には、水寺さんは裏山に来ない。聞けば、その日は仕事があるらしい。彼女もやはり、社会人のようだ。

そのことについて、水寺さんは

「本当はしても意味はないの。けど、私には意味はあるから」

「そうなんですか。で、どう意味かは教えてくれないんですね」

「そうね……。約束、とだけ言っておくわね」

そう言つて、くすつといつもの微笑。それを見るたびに、俺は妙な気分になっていた。悪戯で、可愛くて、切ない、その微笑で。

さつきも言つたが、結局こうやって俺は、いつも水寺さんのことを知れないままにいる。別にそれでも良いのだが、どうしても心のどこかに燻りと言うか、もやもやを感じてしまっている。それは、あまりにも傲慢に思えて仕方ない。

俺は彼女のことは良く知らないし

彼女も俺のことは良く知らない

それで、良いはずだ。それ以上の事は望まないし、望んではいけない。

そう、それで、良い筈なんだ。

——とある、夏の兆しが見えだした日に会った女性。

空を見上げるその視線の先には、青と白と、他に何が見えているのだろう。

答えは、まだ分かっていない。

第三話　水色ともう一つ（後書き）

今回で、視点が変わりました。藤川君です。

この小説の主人公は例の二人ですが、この物語の主人公は彼と言う事です。

第四話「意外」の会合（前書き）

人と人との関係も、物語の大事な要素。
繋がらない筈の糸も、ふとしたきっかけで絡まっていく。

第四話「意外」の会合

夏休みも近づいてきたある日。俺はいつものように水寺さんの下へと通っていた。

ほどほどに険しい山道を通りいつもの場所に着けば、そこにはいつも通り空を見上げている水寺さんの姿が目に入る。俺は軽い挨拶を交わし、近くに座って本を広げた。これが、いつもの風景だ。

そして、しばらく無言の時間が続いた後、俺はふと口を開いて会話を試みる。別に沈黙に耐えられないわけではないのだが、どうせだったらコミュニケーションはとりたい。

「あの、思っただけですけど。雨の日とかはどうしてるんですか？」
割とどうでも良い話題。と言うか質問。まあ、このくらいの方が

無難だろう。あまり入り込んだ質問は、必殺のやりわりスルーで無に帰してしまう。掘り下げない、けどどうでも良すぎない。意外と難しいもんだ。

「そうね、流石に来れないわ。危ないから」

「あー、ですね」

以上、会話終了。仕方ない、水寺さんとの会話なんてこんなものだ。

俺は再び本に目を向け、読書を再開しようとする。すると、今度は彼女の方から口を開き、静かにこう言った。

「それに、ね。雨の日じゃ、あの人は見えないと思うから」

「…その、あの人って、誰ですか？」

「さあ、誰でしょうね？」

悪戯な、笑み。それ見て、俺はまた妙な気分になってしまう。

俺はそれ以上水寺さんの姿見ることが出来ず、今度こそ本に目を向けて読書を再開した。

そして、そのまま何事もなく数十分が経った頃だった。

「――」

「――」

「あら？誰か来たみたいね」

「そうみたいです。……まあ、どうせ興味本位で水寺さんを見に来たんでしょうけど」

前にも言ったが、そう言う奴ら大体、変なものを見たような顔をして帰ってしまうのが常だ。

そんな顔するなら最初から来るなと言いたいが、言ったところで不毛だ。ただの売り言葉にしかない。

どうせ今回も後ろ指を指しながら帰っていくのだろう。そう思うと、嫌な気分になかならない。

「……ねえ、本当にこっちで合ってるの？」

「合ってるって。多分、もうすぐだ」

「ん？あの声って……」

見つかる前に早速身を潜めようとしたが、聞き覚えのあるその声にふとその足を止めた。段々と近づいてくるその声に耳を澄ましてみると、どうやら男女の二人組らしい。しかも、どちらも聞き覚えがあり、尚且つ意外な組み合わせだった。

俺は気になって隠れるのやめ、そちらの方に行ってみる。すると、そこには予想内にして予想外な組み合わせが待っていた。

「そろそろ着くと思うんだが……って、ん？」

「あら、先客かしら」

「杉野……。それに、本堂」

それは、随分と面白い組み合わせだった。二人とも、俺のクラスメイトである。

驚いたのは、杉野が本堂に話しかけている姿は良く見かけたが、一緒に彼女を見に来る仲だったとは思わなかったことだ。いつの間になんか仲になっていたのか。それに、本堂が山登りをしていたと言ったことにも驚きだ。てっきり完全なインドアかと思っていた。

「……何だか失礼なこと考えられてる気がするわね」

「あ、いや、そんなことはないって。ちょっと意外だな、と」

「そう。まあ、確かに私も意外だわ。まさか杉野君と山登りをする日が来るなんて、思ってもみなかったもの」

「俺もな。で、肝心の噂の女の人なんだが……。今日も居ないのか？」
「いや、そこに居る」

彼女が居る崖の方を、指差す。相変わらず、こちらを気にせず空を見上げ続けているのは流石だ。

本来なら居ないと言っても良かったが、どうせバレるだろうし、この二人なら教えても良い気がした。二人とも、悪い奴じゃない……と言うか、むしろ良い奴の分類に入ると言うのは知っている。特に杉野は、偏見と言う言葉なんて知らないんじゃないかと思うくらい、他に平等だ。そう言うのがウザいって奴も居るが、少なくとも俺は好感を持てる。正直に言つと、ラノベを馬鹿にされなかったただけでかなり好感を持てた。単純である。

一方、本堂のことはあまり良く知らない。会話をしたことがないと言うか、こいつ自信が会話をすることも見たことがない（杉野は例外だが）ないのだが……。何となく、大丈夫な気がする。曖昧に言つと、良い奴の雰囲気があるのだ。別に人を見る目があると言っわけじゃないんだが、ここは自分の勘を信じてみるとしよう。

「お、本当に居るな。本堂、ちよつと挨拶でも……。もう居ないだとい？」

「あいつなら一目散にあの人のところ行つたぞ」
「うおつ、マジだ！ いつの間に!？」

俺が水寺さんを指差して数秒経たずに、その下へと駆け寄つていた。あ、案外アグレッシブなんだな、あいつ。俺と同じように噂にはあまり興味がないタイプだと思つたが、そんなことはないらしい。まあ、わざわざここまで来ておいて、実は噂には興味ありませんでしたつてのもあれだけだな。

何にせよ、本堂のちよつと面白い一面が見れたなと感じつつ、俺もその場へ戻ることにした。杉野も一緒にだ。

「けど、先客が居るとは思わなかったな。なあ、藤川」

「悪いのかよ」

「いや、別に。ちょいと意外に感じてな」

意外っておい。それはこっちのセリフでもあるんだが……。どう考えても、お前らの組み合わせや本堂の行動の方が「意外」そのものだ。特に嗜好きと言うわけじゃない俺がここに居るのは確かに意外かもしれないが、目の前の比較対象を見ればそんなこと霞当然の「意外」である。比較する対象が間違っていると言えばそれまでだが。「あら、藤川君。何だか急に賑やかになったわね」

「す、すいません。でも、二人とも俺のクラスメイトで、良い奴等ですから」

「ふふ、何で藤川君が謝るの？それに、別に良いの。いくら人が居ても、気にしないから」

やんわりとした笑顔で、そう言つてのける水寺さん。どうやら本音であるらしい。あんまり騒がしいと、水寺さんの邪魔になつてしまいそうで不安だったが……そんなことはなかったようだ。

俺は少しホツとしつつ、いつもの定位置へついて本を読み始める。あの二人は放置しても平気だろう。

「えっと、初めまして。杉野 時則って言います。どうも」

「初めまして。私は水寺 奏。語ちゃんとはお友達なのかしら？」

「あ、いや。まあ、何と言うか……」

「……………」

水寺さんが何でもないその質問をした瞬間、何故か二人とも何と言おうか困っている顔をしていた。何だ、仲が良かったんじゃないのか？そうじゃなかったら、こんなとこまでわざわざ仲良く山登りなんてしないと思うんだが。

と言うか、本堂はもう自己紹介を終えてたのかよ。しかも、名前と呼ばれてるし……。

「とりあえず、仲は悪くない……と思います」

「そう、ね。まあ、悪くはないです」

「あ、あら、そうなの。とりあえず、よろしくね」

顔は見えないけど、多分苦笑いしてただろうな。俺だってそうだ。何だこの二人の関係は。

それなりに気にはなったが、俺はあくまで本を読み続けることにする。現在、主人公が死んだシーンだ。

……けどなあ、何だこの超展開。死んだ主人公が翼を生やして復活したぞ。この先着いて行けるか不安だな。こう言うのも悪くはないが、もうちょっと読者を大切にしたいもんだ。

そうやって自己満足の批評をしつつ本を読み進めていると、隣りから他の三人の話し声が聞こえてきた。内容が気になって思わず聞き耳を立ててしまいそうになったが、そこはぐっと我慢する。それに意味があるかと言われれば難しいとこだが、俺はあくまで本を読み続けるスタンスを崩さないつもりだ。無論、意味があるかと言われれば、難しい。

……別に、話しに加わりたいたなんて、思っていない。

その後、二人が来てから数十分が経った。会話はまだまだ続いているようである。

と、ここで、杉野が誰もが気になるであろうあの疑問について質問した。かつて、俺が水寺さんに最初にしたあの質問だ。

「そう言えば、水寺さんは何で空なんて見上げ続けてるんですか？」

「ふふ。さあ、何ででしょうね」

けれど、いつもの笑み（実際は見えないが）と言葉で質問は一刀両断。まあ、そりゃあそうだ。もし、これで普通に答えていたら、俺の心は良い感じに八つ裂きだ。何で俺は良くて杉野は良いんだって話である。まあ、気持ちは分からんでもないが。

「あらま、やっぱり秘密か。……ん？どうした本堂」

「……………」

「ほ、本堂？おーい？」

ん？何か向こうが妙な雰囲気だな……。気になって見てみると、本堂が水寺さんを黙ってじっと見つめていた。そして、そんな本堂を少し困惑した表情で見つめるのが杉野。首を傾げて見つめるのが彼女だ。な、何だこの絵面……。奇妙と言うか何と言うか。見方によつては修羅場とかにも見えなくはない。

「えっと、どうかしたの？語ちゃん」

「……………あなたじゃないわね」

「えっと。それは、どう言う意味かしら？」

「ん？あ！いえ、何でもありません！ごめんなさい！」

「あら、そうなの？それなら別に良いけど」

我に返ったのか、かなり焦った様子で謝罪をする本堂。何だか良く分からないが、水寺さんじゃないらしい。一瞬変な雰囲気になつてしまつたが、その後杉野が話題を変え、空気は戻った。そこら辺はやっぱ流石だな。

「そ、そう言えば、水寺さんと藤川つて、知り合いなんですか？」

「知り合いと言つか何と言つか。ただ、いつもここに来てくれるのよ。ね？」

「まあ、そうですけど……………」

「へえー。あ、成程な」

「おい、何だよ成程つて」

「大丈夫だつて。誰にも言わないからさ」

ああ、駄目だ。あの顔は絶対にこつちの考えを読んでいる。幸い、彼女は気付いていないようだ。一応、あいつが誰にも言わないと言ふなら確かにそうなのだろうが、あまり良い気持ちじゃないな。もし万が一でも言つたら、ぶっ飛ばすか。

「……………ん？」

「お、どうした？」

「あ、いや、何でもない」

……………何だ？何か、今視線を感じたような？気になってその方向を見てみたが、本堂が水寺さんを見てるだけだった。まさか、本堂が

俺を凝視していたとは考えにくいので、気のせいだろう。そろそろ読書に戻るとするか。

それから数十分後、例の言葉を機にあまり会話に参加していなかった本堂が、口を開いた。

「ねえ、杉野君。そろそろ帰りましょう。邪魔するのもアレだし」
「お、そうだな。邪魔するのもアレだしな」

二人の会話につられて時計を見てみると、確かにそろそろ良い時間だった。俺も帰る準備をしようとする。

「あら、別に私は構わないのだけど…」

「いえ、時間も時間ですし、もう帰ります。良かったら、また来て良いですか？」

「ええ、勿論。杉野君と一緒にまた来てね」

「あ、いえ、今度は一人で来ます」

「!？」

まさかのオチだった。杉野の方を見れば、すっかり面を喰らっているようだった。それが、軽くショックを受けているようにも見えなくはない。そりゃあそうだろう。これには俺も水寺さんも苦笑いするしかなく、本堂は本堂でしまったと言った顔をしている。口が滑ったとはまさにこの事だろう。

「じよ、冗談よ。また一緒に行きましょう、杉野君」

「いや、無理しなくて良いぞ……。それに、今回はあくまで道案内だったしさ。本来なら、俺は居ない筈だし」

「あー……、それもそうね」

「そこで納得されると、何とも言えない気持ちになるんだが……」
これまた随分な扱いをされ、杉野は再び撃沈していた。本堂も何かフオローを入れようとしていたが、結局思いつかなかったらしく「悪かったわよ…」と静かに呟いて謝っていた。言っちゃ悪いが、中々面白い光景である。

——まあ、何だかんだで良い関係に見るけどな、この二人。

第五話「手紙＋下駄箱」ラブレター？（前書き）

物語は、少しずつ動き出す。

未知の感情に戸惑う少年は、まだ答えが見つからない。

第五話「手紙＋下駄箱」ラブレター？」

昨日。つまり、俺が本堂と杉野に裏山であつたその次の日のことだ。

俺は、いつものように学校へ着き、下駄箱を開けて上履きを取り出そうとする。

ここまではいつもの日常だ。問題はこの数秒後、俺は下駄箱に上履き意外のある物を見つけた。

——手紙。手に取って確認したそれは、一枚の手紙だった。

一体、いつの時代なのか。このご時世に下駄箱へ手紙つておい。最早都市伝説の領域だろう。とは言え、鼓動がはやるのが止まらないのも事実だ。いや、だって、これって、あれだろ……？

ピンクの可愛い封筒の端っこに、綺麗な字で書かれた“藤川君へ”の文字。

……………ラブ……レター……だよな？

鼓動が、体が、異常な反応を示す。早くて、熱い。駄目だ、何か目が回ってくる。

何せ、本来俺はモテない部類の人間だ。あんまり明るくないし、本ばかり読んであまり話さない。テストもそこまで良いわけでもなし、運動もまた然り。顔も……いや、顔について話すの嫌だな。とにかく、生まれてこの方モテた事なんて一切ない人間なんだ、俺はバレンタインデーだって、少し交流のあつたクラスの女子に、義理チョコを2・3個貰った程度だし、これは確定的な事実だ。

一体、誰がこれを入れたのだろうか。思い当たる人物はいない……し……。

「と言うか、差出人は誰……だ!？」

とりあえず、誰がこの手紙を書いたのか確認すると、裏に差出人らしき名前が書いてあった。そして、それを見て絶句する。

これは……どう言う事だ? 何で、何であいつが俺にラブレターなんて……。もしかしたら、これはラブレターじゃないのか? と言うか、これは本当にあいつが書いたものなのだろうか。差出人の名前は確かにそれだが、そんなのはいくらでも偽ることが出来る。

と、すれば、これはやはり悪戯と言う事なのだろうか。だとすれば達の悪い悪戯だが、至極納得出来る。

「……多分、そうだよな。いや、けど」

「お、藤川じゃん。おはよー」

「うお!？」

熟考してたところにいきなり話しかけられ、思わず飛び上がる。心臓が飛び出るかと思った。

しかし、問題はそこじゃない。問題は、話し掛けてきた相手なのだ。

「な、何だよ。そこまで驚かなくても良いだろ」

「い、いや。悪い。おはよ、杉野」

俺は限りなくぎこちない笑顔で、挨拶を返す。やべえ、俺ってあまり笑わないから上手く出来ん。完全に引き攣っている。

当然、杉野はそんな俺を訝しげに見つめてくる。どうする。この手紙のことが杉野にバレたら――

「ん? 藤川、その手紙なんだ?」

「!?? え、あ、いや、これは!」

あつという間にバレてしまった。そりゃそうだ、手紙を全く隠してなかったのだから。そもそも、突然のことで隠しようがなかったし、背後に隠したところでどう考えたって何か隠してますよのポーズになるだけである。どうしろって言うんだ。

無論、杉野が俺を見る目は、ますます訝しげとなった。仕方ない、何とかして差出人だけでも誤魔化そう。それがバレたら終わりだ。

「ああ、ラブレターか、それ。今時下駄箱とか、中々古風な奴なんだな」

「そ、そ、そうだな」

「ちなみに、差出人は誰なんだ？裏に書いてあったりは……」

「書いてない！書いてないな！多分、会ってみないと分からないんじゃないか……！」

「お、おう、そうか。そんな必死に言わなくても良いと思うぞ」

そう言っ、杉野はそのまま教室へ行ってしまった。一応、通りすがりに肩を叩かれて“頑張れよ”って言われたが、余計なお世話だ。

まあ、けど、これで最悪の事態は回避した。差出人が誰かバレると言っ、最悪の事態は。

「……………」

俺は、改めて差出人の名前を見してみる。そこには、依然として変わらない綺麗な文字で、あいつの名前が書き記されていた。駄目だ、信じられん。何でこいつが俺なんか……。

混乱する頭をとりあえず切り替えつつ、俺は教室へ向かう。今はそれを優先だ。

——今日は、何だか非日常な匂いがする。

時はあっという間に過ぎ、放課後。まるで時計の針を倍速にしたかと思うくらいあっと言っ間だった。授業もあの手紙のことで頭が一杯となり、全く頭に入っていなかった気がする。それでもノートはしっかり書いてあるところは、流石と言いたい。

俺は、段々とクラスメイトが教室が出て行く中、あの後トイレで

こっそり読んだ（何となくそれが定番と思った）手紙の、いや、ラブレターの内容を思い返してみる。

『放課後、お話しがあります。教室に誰も居なくなるまで残って下さい』

それだけの、非常に短い文だった。ちなみに、字は封筒に書いてあった字よりも更に丁寧に書いてあった。手書きとは思えないほど綺麗で、もしかしたらワープロか何かでも使ったんじゃないかと思うくらいだ。けど、ちゃんと鉛筆で書かれていた。

とりあえず、俺はその手紙の指示通り、教室で誰も居なくなるのを待ってみる。途中で友人と一緒に帰ろうと言われたが、無論断らせて貰った。訳を知らないため、不思議がられたが。

数分後になると、最後まで雑談していた女子の二人組も教室から出て行き、遂に誰も居なくなった。いや、あと一人だけ、教室に残っている。そいつは俺以外のクラスメイトが居なくなったのを確認し、ゆっくりとこちらへ歩いて来た。

「ありがとう。手紙、読んでくれたのね」

「あ、ああ」

そいつは俺の席の前に立ち、そう告げる。本当に、こいつだったんだな。

—— 本堂 語。それが、差出人の名前だった。

最早、意外とかそう言う話ではなく。あり得ないの領域だ、これは。あの本堂が俺にラブレターなど、天地がひっくり返っても起こりうることはない。そもそも、こいつってそんな柄か？ いや、それはいくらなんでも失礼か。

だが、俺が本堂と話したのって、昨日のアレが始めたなんだぞ？ それまで、交流なんて一切なかった。それなのに、いきなりあんな

ものを……。混乱することしか出来ないのも無理はないだろう。
杉野に差出人を言わなかったのも、このせいだ。だってあいつ、本
堂のこと好き……。なんだよな？ 良く知らないけど、俺はそう思っ
てる。

「どうしたの？ 人の顔ジツと見て……。何かついてる？」

「あ、いや。その、な、何でもない」

「そう」

つつい、凝視してしまっていた。と言うかこいつ、かなり美人
だったんだな。水寺さんとは違うベクトルの美人って感じた。何と
言うか、クールビューティ？ って言うのだろうか。多分、今までこ
んなに近くでこいつの顔を見たことがなかったから、気付かなかっ
たのだろう。普段も良く本を見ていて、顔があまり見えないしな。
もうちょつと地味なイメージがあつたが、一気に払拭された。

「それで、話しただけ……。その前に一つ良い？」

「お、おう。何だ？」

「藤川君は、その…好きな人とか…居るの？」

「！？」

な、何てこと聞いてるんだこいつは！ それ、もうかなりフラグた
つてるセリフだろ！ てつきり俺は、やっぱりラブレターじゃありま
せんでしたオチだと思つてたのに、これは流石に…。ど、どうする
んだ！？ どうすれば良いんだ？ いやいよ思考が追い付かなくなつて
いき、体も熱い、鼓動も早い。軽いパニック状態だ。

「答えにくいなら、別に良いわ。その、ちよつとした確認だから」

「そ、そう言われても、な。えーつと……」

「やっぱり、言いたくない？」

「あ、いや。その、何と言うか……」

駄目だ、言葉が上手く出てこない。仕方ないだろ、どうすれば良
いか分からないんだ。どう答えれば良いか、分からない。

いや、答えようと思えば、答えられる。けれど、それは自分にと
つては酷く曖昧な答えであり、自分でもそれが事実かは分かってい

ないのだ。「好きな人」……そうかもしれない。けど、それだけじゃないと言つか、何と言つか。とにかく、自分でも良く分かっていない。だからこそ、答え辛いのだ。あと、単にパニックに陥っているからと言つのも、ある。

「無理に答えようとしなくて良いわ。本当に、あくまで確認だから」

「そ、そうか。悪い。俺も良く分かってないんだ」

「別に良いわ。じゃあ、本題に入るわね」

本題って、ついに来たのか……。や、やばいな、流石に緊張してきた。一体どうすりや良いんだよ……。心の中であたふたしつつ、俺は本堂の言葉を待つ。少し言いくそな顔をしてるのがまた困る。

しばらくの沈黙の後、いよいよ本堂がその口を開いた。

「――」

が、しかし、俺はその言葉の意味を理解することは出来なかった。

何を言ったかは分かる。けれど、その意味が分からなかった。

あまりにも予期しなかった、その言葉。何だ、それは。どう解釈しろって言っんだ。

俺の物語を集めたいって、どう言う意味なんだ？

第六話　語、語り　（前書き）

彼女は語りを求め、何を思うか。

少年は何を求め、語りを憂うか。

第六話　語、語り

帰り道。俺は珍しくあの人の元へと向かわず、真っ直ぐに家へと向かっていた。

……わけの分らないことが、多すぎる。

ほんの数十分前まで行われていたやり取り。それは、俺には全く理解の出来ないものだった。

お陰様で、頭がごちゃごちゃしている。それを整理するためにも、俺は早々に家へ帰りたかったのだ。

一応、帰路の途中でもそのやり取りを思い出してみようと、さっきまでの会話を振り返ってみた。

「藤川君。あなたの物語を、集めさせてくれないかしら？」

これが、そのやり取りの引き金だった。その前はちよつと、色々と思い違いをしていただけだ。

てつきり告白されると勘違いしていた俺に投げかけられたこの言葉。意味不明にも程がある。俺は大いに混乱しつつも、何とか口を開き受け答えをする。

「えつと、悪い。どう言う意味だ、それ」

「あら、ごめんなさい。抽象的すぎたわね。具体的に言っわ」

「ああ、頼む」

「じゃあ改めて。……あなたが水寺さんと紡いでいる物語を、集めさせてくれないかしら？」

「……………」

具体的になつたと言えば、なつたかもしれない。けれど、それでも俺は理解が出来なかった。と言うよりも、これで理解出来る奴なんているのだろうか？ いや、いないだろ。ただの電波な台詞としか

思えない。

……けど、何故だろうか。不思議と、その言葉には何かしら意味があると言うことは感じ取れた。目の前で、それ以上語らない本堂の目を見ても分かる。こいつは、本気でその意味不明な言葉を発していた。

「……俺と、水寺さんが紡ぐ物語、か。悪い、もうちょっと詳しく頼む」

「あら？てつきり意味不明だとか言われて帰るのかと思ったんだけど」

「意味不明だよ。だから詳しく聞いてるんだ」

「そう。ふふ、あなたもそっちの人なのね。非日常に、慣れてる人」
嬉しげに、そして可愛らしく微笑む本堂。言葉の意味は分からなかったが、その笑みには不覚にもドキツとした。だって、あまりにも似ていたから。本堂のその微笑は、あの人の微笑とあまりに似ていた。

全てを知ったうえで、こちらの言動を少しからかっているようなけど、優しく受け入れるような、そんな微笑。

と言うか、こいつの笑顔とか物凄い珍しんじゃないか？失礼な言い方だけど。

「つーか、帰ると思うなら何故聞いた」

「こっちも慣れてるから。うん、久しぶりだね。私の言葉を受け入れてくれた人は」

「意味は全く分からないけどな」

「それでも良いの。で、詳しい説明だったかしら？」

「ああ、そうだ。と言う意味だよ、俺と水寺さんが紡ぐ物語って」

「そうねえ……。悪いけど、そのままの意味よ。内容は、あなたが良く知ってるはず。だって、あなたの物語ですもの」

「ああ、そうか。全く分からん」

まるで説明になっちゃいない。意味があるのは分かってても、その意味が分からない。どうなってるんだ。

流石に辟易としてきた俺に、本堂が再び語りかけてきた。

「別に、分からなくても良いの。ただ、これだけは分かって」

「なんだよ？」

「物語を集められると言うことは、どんな結末であろうと私に知られてしまうの。それだけは、分かって」

「何だそりゃ。プライバシーが侵害されるのか？」

「まあ、ざっくり言うそうね。自分だけの物語に出来ないの。それが嫌なら、断って」

「断るって……。物語を、集めて良いかどうかをか？」

「ええ」

そうは言われても、困る。未だに物語を集めるって言葉の意味が分からないため、答えようがないからだ。

そのことを本堂に告げると、あなたのタイミングで良いから、と言われた。いや、けどな…

結局、わけが分からないまま本堂は帰ってしまった。俺は唯一人、黄昏色の教室で佇む。

一体、何だったんだろうか。元から良く知らない奴だったが、これでますます意味が分からなくなった。唯一分かることと言えば、決して電波と言うわけではないと言うことだけだ。根拠は一切ないが、これだけは断定できる。あいつは多分、本気で俺の物語を集めると言う、理解が及ばないことをしようとしている。

……とりあえず、帰ろう。俺は鞆を手に取り、教室を出て行った。

——これで、一通りの流れは終わりだ。いつの間にか、家の近くまで来ている。

やっぱ、今思い出しても意味不明だ。何なんだ、物語を集めるって。どう解釈すれば正解なんだよ。それに、俺と水寺さんが紡ぐ物語ってのも意味不明だ。どっかのRPGのキャッチコピーかと言いたくなる。

「……でも、何となく分かる気がするんだよな」

茜色が映える空を見上げながら、ポツリと呟く。確かに俺は今、小説のような、それこそライトノベルなんかにあるような物語の中にいる気がするのだ。

明らかに日常とは違う、非日常的な物語の中。水寺さんと出会ったことが、そのきっかけだろう。

その物語の結末は、俺には分からない。もしかしたら、そんなものはないのかもしれない。

けれど、本堂はそれを“集めたい”らしい。それがどう言う意味なのかは分からないが、そう言っていた。

「……結末、か」

それが、俺の望むようなものなら、どんなに幸せだろうか。けど、きつとそれはあり得ないだろう。

好きと言う気持ちでは抑えられないこの感情は、未だにくすぶり続けている。

家に着いて、数時間が経った。既に夕飯も済ませ、風呂にも入っている。後は寝るだけだ。

俺はいつもの日課として、寝る前に本、ラノベを読んでいる。今日とてそれは例外ではない。

しかし、かなりの超展開だな。主人公何回死んでるんだ、これ。

その度に暴走モード入って敵味方関係なく襲ってる。

でも、それを主人公や仲間が止めようとしている描写はなかなか面白い。毎回毎回、良くこんなに思いつくもんだ。何だかんだ言いつつ、その世界に没頭していつてしまう。

そうやって本を読み進めていると、ふいに携帯が鳴った。発信者は……不明？

「はい、もしもし」

「もしもし。藤川君？」

「ん？本堂か。あれ、何で俺の携帯番号知ってるんだ？」

「さつき、杉野君に電話して教えて貰ったの」

「へえ、杉野の番号は知ってたのか」

「前に、無理矢理番号を書いた紙を渡されたのよ。別に捨てても良いからって」

「……そうか」

あいつもなかなか強引な奴だな。やっぱ、本堂のことが好きなんだろう。素直に行動出来て羨ましい。

それにしても、その紙を捨てなかった本堂も本堂だ。それなりに気があるのかもしれないな。

「それで、要件なんだけど……」

「お、おう。もしかして、放課後のアレか？」

「うん。謝りたいと思って」

「はあ？何で謝るんだよ」

「だって、あまりに突然すぎたから。多分……いいえ、絶対に混乱させちゃったわよね」

「あー、まあ、な。けど、そんな気にしてないって」

「……本堂？」

「本堂本堂。と言うか、本堂の意外な一面見れて、ちょっと得した気分だし」

あの彼女とそっくりな微笑。正直、あれにはかなりドキッとしたもんな。俺って安いなー、おい。あまり女子との交流が多くないし、免疫がないのだろう。小学生の頃は普通に接してたような気がするけどな。

「そう。それは良かった……のかしら？」

「そう言うことにしとけよ。とにかく、気にすんな」

「ええ、そうするわ。ちなみに、今何かしてた？」

「え？ああ、ラノベ読んでた。ラノベって分かるか？」

「分かるわよ。私も読んでるから」

「マジでか。へー、意外だな」

「そう？私、割かし何でも読むから」

「成程。じゃあさ、本堂なりのお勧めとか教えてくれよ。興味あるし」

「良いわよ。最近気に入ったのは――」

その後、一時間以上にわたるラノベが談義が行われた。やっぱ分かる人が居ると盛り上がるもんだ。

意外だったのは、本堂が結構喋ってくれる奴だったってこと。俺はてつきり、口数が少ない奴だと思ってからだ。学校でも、杉野意外の誰かと話している所はあまり見たことがないし、本堂自身から話しかけてくることなんて極稀だ。

一応、例の放課後の件でも良く喋ってた気がするが、あの時の本堂は、こう、何か違ったし、しょうがない。ノーカンである。

「あら、そろそろ寝る時間ね」

「お、そつか。じゃあ切るな、おやすみ」

「ええ、おやすみ。その、楽しかったわ。ありがとう」

「こっちも楽しかったよ。ありがとな」

「うん、また明日」

ツーツー。俺の耳元に、通話を知らせる音。さて、俺もそろそろ寝るとするか。

電気を消して、布団へ入る。そのままどろみを迎える中で、とある思考がふと俺の頭をよぎる。

――本堂とは、良い友達になれるかもしれない、と。

翌日。学校へ着くとまず本堂の席に目がいった。そこには既に本堂が席に着いており、いつも通り本を読んでいる。

何を読んでいるかは分からない。ブックカバーを付けているからだ。付けない派には良く分からないな、それ。ページを捲るたびにずれて行って、邪魔な気がする。

ちなみに、本堂は時々ハードカバーの本も読んでいる時があり、

ちよつとだけ格好良いと思ったりする。いかにも読書家と言った感じだ。

とりあえず、俺はまだこちらに気付いていない本堂に近づき、軽く挨拶を試みる。良く考えると、こうやって話しかけるのは初めてな気がした。

「おはよ、本堂」

「あ、藤川君。ええ、おはよう」

「それ、何読んでるんだ？」

「藤川君がお勧めしてくれたやつよ。今朝、買ってきたの」

「お、そうか。ん？でも、そんな朝早くから本屋って開いてるのか？」

「あ、え、うん。近くに、朝早くからやってる本屋があるの」「へー」

そう言うのって、案外珍しくないもんなのだろうか。俺の近くでは9時からだな。

その後、少しだけ会話を交わし、俺は席についた。そして、いつものようにラノベを読む。

最初は集中していたが、少し経つとつい本堂の方を見てしまうようになる。俺もそこまで節操がないわけじゃないが、どうしても気になってしまう。

一方、クラスの奴らは、基本的に本堂に対して無関心だ。なるべく、関わらないようにしているのが良く分かる。俺が本堂との会話を終えて席に戻る途中も、好奇の視線が向けられていた。

原因としては、やはり本堂があまり自分と言うのを見せないタイプだからと言うのが挙げられる。常に本を読み、世界を作っていて、どうしても近寄りがたい。……けど、一回蓋を開ければ、何てことはない。普通に良い奴なのだ。そう言うのは、良くあることだ。

「よう、本堂。今日は何読んでるんだ？」

「これ」

「いや、ブックカバーを取ろうぜ」

「心の目で見れば、分かるわ」

「いや、お前は俺に何を求めてるんだ……」

本堂と杉野の会話が聞こえる。やっぱり、仲良いよなああの二人。傍から見ればそうとしか見えない。

杉野は、唯一本堂に話しかけていた奴だ。多分、本堂がどんな人物かを、一発で見抜いてたんだろうな。

だからあいつは、人気者なんだ。どんな奴でも変わらず接し、かつその人のことを良く見ている。

周囲を幸せにする。って言ったら大袈裟だが、確かにそんな感じだ。あいつは、俺なんかとは正反対の人間だな。

「俺も、ああ言う風になれたらな」

そんな虚しい独り言と共に、俺は読書を再開する。そんなの、あり得ないって分かりきったことだ。

例えなれたって、俺とあの人の関係は、何も変わりはないさ。

第七話 その瞳の先（前書き）

知りたいと願うことには、覚悟がいる

彼女の想いは、少年の物語をどう動かすのだろうか

第七話 その瞳の先

帰り道。と言うか、水寺さんに会う途中の道。さっきまで隣に居た友人とは既に別れ、俺は一人でその道を歩いていた。

一応、友人とはいつも途中まで一緒に帰ることにしている。そうするとどうしても裏山とは逆の方向に行ってしまうが、仕方ない。

何故なら、なるべく友人には、水寺さんの下へ通つてることを秘密にしたいからだ。からかわれたり止められたりするのは鬱陶しいし、対応も面倒くさい。だったら、秘密にしていた方が良さだろう。そんなわけで、俺は今日も一緒に帰る“ふり”をして、友人と別れたら後、すぐに来た道を戻り裏山へ向かった。正直、かなり面倒くさいし、こんなの自分から見たって馬鹿馬鹿しい。何やってんだろうとは思う。

けど、一緒に帰ることを何度も拒めば、流石に怪しまれると言うもの。こうでもしないと、バレる恐れがあるのだ。

いや、もういつそバラした方が楽なんじゃとは思うには思うが、何か最近はや地みたい感情が沸ききている。ああ、馬鹿だな。

(さて、と。ここを登ればあの人の場所だな……)

歩き続ける(最初だけ全力ダッシュだがすぐへばる)こと数分。裏山の入口へと到着した。目の前には、整備された長い長い階段。水寺さんに会うのは決して楽なことではなく、この階段をしばらく歩いて尚且つ途中で道を外れなければいけない。これをほぼ毎日繰り返してる俺も俺だが、水寺さんも水寺さんである。女性にはなかなかハードだと思うのだが。まあ、慣れだろうな。

「俺も早く慣れないもんかな……」

階段を目の前にして、溜息交じりにそう呟いた。はつきり言つて、俺は体育会系とはほど遠い存在であり、そんなに体力があるわけでもない。むしろ、平均より少ない気がする。極端にないわけではないが、軽い山登りに辟易する程度には、ない。

しかし、それでも登ろうとする意気が俺の中から抹消しないのは、どう考えても水寺さんと言う存在が原因だろう。そりゃそうだ、誰が好き好んでこんな山登るかよ……。俺は再び溜息を交えながら、階段を登り始めた。

そして、そいつはまさしくその時に現れたのだ。

「あら？あの人に会いに行くのね」

「！！」

突然だった。断言する。そいつは、確かにさっきまでその場に居なかったはずだった。けど、声がした方を振り向けば、そいつは確かに居て。微笑を浮かべながら俺のことをじっと見据えていた。

本堂 語。そいつはいつの間にか現れていて、俺に話しかけてきたのだ。

「あら、驚かせちゃったかしら？」

「心臓に悪かったとだけ言っておく……。全然気配なかったな」

いや、気配がなかったと言うレベルではなかった。まるで、何もない空間から現れたかのように、突然だったのだ。と言っても、実際にそんなこと出来るわけがない。単に、俺は鈍かったと言うことにしておこう。

「まあ、私って影薄いからね。それより、行かないの？」

「へ？」

「へ？じゃないわ。行くんでしょ、あの人の所」

そう言いながらこちらに近づき、階段を登り始める本堂。ああ、そう言う事か。

俺は黙って頷き、本堂の後を追う。こいつもあの人に会いに行くのか。そう言えば、また会うとか言ってたな。

「藤川君は、いつから水寺さんの下に通ってるの？」

「大体一か月前くらいからだな」

「へえ。一カ月もあの人のに通い続けてるのね」

「まあ、な。これからも多分そうだろうよ」

どうせ、他にすることがないしな。だったらバイトでもしろと言われそうだが、そこはあえて耳を塞ごう。

いや、分かっている。自分でも我ながらアホなことしてるとは。けど、やめられないのだからしょうがないだろう。俺があの人の下へ通う事は、既に「日常」の一部と化しているようだ。今更、急にはやめられない。

「中々憔悴してるのね。何がそこまで藤川君を駆り立てるのかしら」

「さあ？俺もよく分からん。何となくだよ、何となく」

「あら、そう。ふーん……」

言いながら、ジーっと俺を疑惑の視線で射抜いてくる本堂。どう見ても嘔吐きを見つめる目つきだ。

しかし、本堂はそれ以上何も言わず、視線を外してしまった。追及する気はないのか、単に興味が無いのか……。こいつの考えてることは、いまいち読めないな。無表情だからつてももあるが、それ以上に何か別の要素がありそうだ。心に特殊なフィルターでもかけているんだろうか。

「そう言えば、杉野の奴はどうしたんだ？」

「今日は来てないわ。一応、誘おうと思ったけど、友達と仲良く話してたから誘いにくかったの」

「あー、分かる。確かに声かけ辛いよな、そう言う時って」

間の悪い奴だな、あいつも。とりあえず同情だな……。折角本堂に誘われたかもしれないのに。教えてやったら悔しがったりするのだろうか。と言っても、あいつが実際に本堂に片思いしてるかどうかは不確かだし、微妙なところだ。単なる俺の思い込みかもしれない。それならそれで別に良いが、何となくガツカリするのは何故だろうか。結構性格悪いな、俺……。

その後、特にこれと言って会話はないまま、お互い水寺さんの下へと向かっていった。気まずいと言うか何と言うか、妙な気分だ。本堂は特に会話が無くても平気なようで、得に変化はない。俺もその

筈だが、それはあくまで親しい間柄のみである。

無論、本堂とはそれなりに近い心の距離にあるとは思ってるが、それでも友人とは違う何かだ。会話がないとどうも落ち着かない。仕方ない。そう思い、あまり得意ではないがこちらから話題を振ろうとする。

「ねえ、藤川君」

「うお！？な、何だ？」

それより先に、本堂から話しが降られた。思わず変な発声になりそうになったが、何とかとどまる。

だが、リアクションは確実に変だったため、一瞬怪訝な表情で見られた。思いつきり恥ずかしいと言つか何と言つか……。

「えっと。質問しても良いかしら？」

「あ、ああ。好きにしてくれ」

「そう。じゃあ聞くけど、藤川君はあの人の事どう思ってる？」

「はあ？あの人って、水寺さんのことか？」

「他に誰が居るのよ。良かったら、教えてちょうだい」

教えてちょうだい……と言われてもな。どう答えれば良いかさばり分からないんだが……。

と言つのも、俺があの人をどう思ってるかなんて、自分でも良く分かっていないからだ。誤魔化しではなく、本心から。いや、まあ、ある程度は把握してるさ。けど、どうしても「その先」が分からない。分かってる感情は、ただ一つ

「——好き。それしか分からないな」

「好き？それは、ラブかしら、ライクかしら？」

「ラブじゃねーの。年上好きってわけじゃないが、多分そっちだろ」
「……ずいぶんとあっけらかんに言つのね」

驚きか呆れか、そのどちらかの感情を含めた声色だった。そりゃそうか。俺だってそうなるだろうよ。

けど、俺はあの人を単に「好き」と思っているだけとは思えない。その先に、言葉じゃ言い表せない何かがある気がするのだ。

それは好きの延長線上にある更なる感情か、それとも全く別の異なるものか……。未だに、それは分かっていない。

「まあ、好きであることに変わりはないんだろうよ。それだけは確かだ」

「じゃあ、プロポーズとかしてみたのかしら？」

「んなわけあるか。確実に片思いだっていうのになんでわざわざ玉碎しなきゃなんないんだよ」

「あら、そんなの分らないじゃない。もしかしたら、希望はあるかもしれないわ」

「馬鹿言え。一カ月も通ってたら分かるっつーの。あの人が空を見る目は……」

あの人が、空を見る目は……

——自分が、愛してた人を見る目だ。

それに気付いたのは、いつからだっただろうか。

あの人の瞳の込められた感情。それは、愛する人を見つめる眼差しそのものだったことに。

恋人、いや、結婚してたっておかしくない。むしろ、結婚なんて必要ない。傍にいただけで愛を感じられる。お互いを極限まで愛し合った末に辿りつける眼差し……。そう言えば伝わるだろうか。

「もう、片思いってレベルじゃないさ。思うだけ無駄だろ」

「そうねえ……。確かに、他に好きな人が居る。いえ、居たなら、厳しいと言わざるを得ないでしょうね」

「だろ？まあ、それでも好きなんだけどな。アホらしいけど」

「そう。あら？と言うか、藤川君が水寺さんの下へ通う理由は、それじゃないの？」

「さあ、どうだろうな。そうなんだろうけど、微妙なとこだ」

「何となくってことはないと思うし、それ以外考えられないと思う

けど？」

とは言っても、本当に分からないんだからしょうがない。もし単純に好きだからと言う理由で通っていたら、すでに希望がないと気付いた時点で通うのをやめている気がするからだ。

無論、単純に諦めが悪いと言っこともかもしれないが、別に俺はそんな粘着質な性格ではないし違うと信じたい。

本当、何でなんだろうな。自分でも良く分からない。分からないけど、これからも通い続けるだろう。直接、二度と来るなど言われるまではな……って、何かそれはそれで色々駄目っぽいけど、まあ良いか。

その後、特にこれと言った会話はなく、淡々と水寺さんが居る場所へと向かっていた。何か話題はないかと考えたが、思いつく前に本堂が何やら思案していることに気付き、やめにした。話し掛けない方が無難だろう。

そして、更に歩くこと数分。ようやく辿りついた。毎回思うが、地味に遠い。

尚、当たり前と言えば当たり前だが、水寺さんは相変わらず空を見上げていた。これも毎回思ってるが、良く首疲れないよな。

「どうも。こんばんわ」

「こんばんわー」

「あら、藤川君。それに、語ちゃんまで」

俺と本堂が挨拶すると、水寺さんがこちらに気付き顔を向けた。穏やかで、優しい人柄が伝わるその自然な笑顔は今日も健在のようだ。正直のところ、この笑顔には毎回心拍数を上昇させて頂いている。俺って単純だなとか思いつつ、こればかりはどうしようもない。惚れてるからってのもあるが、これは別に惚れてなくても一瞬ドキリと思うな、俺は。

この事についてはもっと深く語りたいが、これ以上語ると俺がまるで笑顔フェチ何て言う世にも斬新な性癖概念を付属させられそうなので、やめておこう。それはなるべく遠慮したいレッテルだ。

「あら？どうしたの、藤川君。私の顔じつと見て」

「ああ、いや、何でもありません。じゃあ、ちよつと失礼します」

断りを入れ、いつものように水寺さんの近くに座る。そして、これまたいつもの如くラノベを読みだす。最早定番の流れだ。

水寺さんもそれを見届けると、再び空見上げのことを開始した。

そして、やはりその瞳には何とも言えない様々な感情が含まれている。さつき、「それは愛する人を見つめる瞳」とは言ったが、やはりそれ以外の感情も含まれている。あくまで、それがメインと言う事だけだ。

それは、悲しみとか慈しみとか分かりやすいものでもあれば、どう表して良いか分からない、複雑な「思い」も混じっている。

俺には、それが何なのかは分からない。けど、だからと言って尋ねる気はない。それは、あまりにも無粋と言うものだ。

「私も本でも読もうかしらね……。隣、良いかしら」

「ああ、別に良いぞ」

ありがとう。一言そう告げて、本堂が俺の隣に座る。鞆から取り出したのは昨日俺がオススメしたライトノベルだった。朝読んでたのは一巻だったが、今持っているのは二巻。もう一巻読み終わったのか……。

と言うか、良く見たら二巻もほとんど終盤だった。休み時間をフルに使って読んでるんだな……。気に言って貰えたようで嬉しい。

「それにしても、この主人公は良く死ぬのね……」

「ああ、それは四巻で理由が分かる。結構意外な展開だぞ」

「へえ、そうなの。楽しみね」

ここで会話は終了。まあ、下手なこと話してネタバレするわけにはいかないからな。これで良いだろ。

さて、俺も読書を始めますか……。

読書を開始してから、30分程が経った。辺りはまだ明るく、まだまだ帰宅を焦ることはなさそうだ。

本堂は既に3巻に突入しており、時々入るギャグシーンに淡い笑みを漏らしていた。水寺さんは……相変わらずである。

俺はと言うと、実はあまり読書に集中していなかった。良く考えればすぐ隣に異性（しかも美女。本堂には隠れファンが多いとの噂があるくらいだ）いるわけだし、つつい気が散ると言うか、上手く集中できない。何か、そんな自分が嫌過ぎて更に集中できないから困ったもんだ。

仕方ないので俺は読書を中断し、水寺さんの隣へと移動した。向こうは近づいて来た俺に気が付き、一瞬笑みを向けてすぐに空を見上げたした。

「えっと……。邪魔ですかね」

「ううん、そんなことないわ。気にしないで」

「なら良いですけど。……ちなみに、質問は？」

「ええ、受け付けてるわよ。答えてあげられるかは、分からないけど」

「それでも良いです。一つ聴きたいことが——」

と、そこまで言って一旦言葉を区切ってしまった。水寺さんは小首を傾げつつも、発言を待っていてくれている。

とは言え、やはり聞くべきじゃないだろうか。水寺さんが愛していた人の事なんて。あまりにも、無粋か。ここはやはり、他の差し障りない質問にすり替えた方が良い気がしてくる。

けれど、どうしても知りたい。何故かと言われれば困るが、どうしても知りたい。

……いや、明確に言うと、そこからもつと水寺さんのことが知りたいのだ。何か、思考が完全にストーカーみたいになってるが、別に水寺さんことを諦めていないわけじゃない。ただ純粹に、水寺さんのことを知りたいだけなのだ。それが無粋な質問をしても良いと言う免罪符には一切ならないのは分かっているが、思いを止める

ことは出来なさそうだ。

俺は覚悟を決め、思い切って聞いてみる。愚行だろうとやってやる。どうせ答えてくれないとは思うが、意を決した。

「あ、あの、水寺さんの好きだった人って、どんな人だったんですか……？」

「あら？ 気付いてたの？」

「まあ、何となく。えっと、だつ「た」で正しかったですか？」

「そうね……。確かに、あの人はもうこの世にはいないから……」

俯き加減で、そう答えてくれた水寺さん。直後に、重く苦しい沈黙が流れる。あ、自爆したなこれ……。やべえ、どうすりや良いんだ。後悔するなら質問するなよと自分に突っ込みたいが、もう遅い。これは、質問をした代償だ。そもそも、このくらいは予測しとけ、と俺は、どう声をかけて良いか分からず馬鹿みたいにあたふたしていた。その様子を見て、水寺さんが少し困ったような、そしてどこか悲しげな笑顔で、言葉を続けてくれた。

「森永^{もりなが}達也^{たつや}さん……。それが、その人の名前よ。とある駄菓子屋で働いてたの。けど、あまり繁盛してなくて、いつも『いつか有名な店にしたい』って言ってたわ」

「駄菓子屋、ですか……。この辺に駄菓子屋なんてあったかな」

「ええ、目立たないけどね」

そう、だったのか……。とは言え、俺はこの町から一駅離れた場所に住んでいるので、あまり詳しくないからな。知らなくても無理はないだろう。ただ、水寺さんが言うには地元の人にさえあまり知られていないそう。ただ、どこだけ地味で目立たないんだよその店……。

「水寺さんは、どんな経緯でその人と知り合ったんですか？」

「そうねえ。偶々その駄菓子屋を見つけて、通い続けてたら仲良くなった。って感じがしら」

「ずいぶんとざっくりしてますね……」

「それ以外に言いようがないもの。それとも、もっとロマンチックなのを期待してたのかしら？」

「いえ、駄菓子屋って時点であまり」

「あら、酷いわね」

と、言いつつくすくす笑う水寺さん。その姿が無性に可愛く思えてしまい、自分が相当末期な状態であると言う事を思い知らされた。その後話しは続いたが、森永さんについての詳しい話しは、あまり聞けなかった。せいぜい、「彼はとても優しくて、何事にも一生懸命な人だった」と説明されたくらいだ。

一応、写真も見せて貰った。整った顔立ちで、確かに優しくそんな雰囲気だ。けど、眼に何かしら強い意志が見え隠れしているような、そんなイメージだった。

「結婚も考えてたけど、その前に事故に亡くなっちゃったの……。もうすぐ、一年経つわね」

「そうなんですか……。やっぱり、凄く愛し合ってたんですか」

「ええ。恥かしいけど、私も、彼も、お互いを深く愛してたわ」

「……………」

それを聞いて、少し胸が痛んだ俺が居た。それが許せなくて自分を殴りたかったが、自重だ。帰ったらじっくり殴ろうじゃないか。

とにかく、二人は本当に理想とも言うべき恋仲だったらしい。別れるとか、他の人を好きになるとかなんてことは、考えたこともなかったそうだった。

何と言うか、予想以上だった。いや、仮に予想以下でも別に何かあった訳じゃないけど。ないったらないんだよ。

「けど、彼はもう居ないわ。今はもう、空の上よ」

「……………」それで、いつも空を見上げてたんですか？」

「そうよ。ここは、私と彼が良く来てた場所なの。彼が私と知り合う前からずっと、気に入ってた場所」

「つまり、思い出の場所ですか」

「そうなるわね。ふふ、ついつい話しちゃったわね。本当は、なるべく秘密にしていたかったのだけ」

まあ、でも、藤川君なら構わないわ。そう言った後、水寺さんは

空を見上げのことを、いや、森永さんを見つめることを再開してしまった。

俺なら構わない……。本来なら喜ぶべき言葉だったかもしれないが、言われた本人はその場でアホみたいにボーッと突っ立っていた。本堂に肩を叩かれるまでそうしてたくらいだ。

……別に、予想通りだった。いや、例え予想が外れてても、別に俺の状況が変わる訳じゃない。それなのに、何故だろうか。こんなに胸がモヤモヤするのは。

本堂はそんな俺を見て何か言いたそうだったが、結局何も告げず読書を再開してしまった。仕方ないので、俺も本を広げてみる。

だが、結局読書に集中なんて出来るはずなく、時間は来てしまった。俺も、本堂も、水寺さんも山を下りてそれぞれの帰路へと散っていく。

そして、歩きながら考える。

最初から、全部分かったのに。望みなんてない。今でも彼女は彼を愛しているってこと、考えなくても分かる事なのに。

どうして……

どうして、こんなにも辛いのだろうか？

第八話 } f i r s t c o n t a c t } (前書き)

人ではない人としての、最初の接触

彼女は、“集める人”

第八話 first contact

「あら、そろそろ時間ね」

長く続いていた静寂の中、本堂が携帯を見ながら徐にそう呟いた。時刻は既に6時だ。

結局、あの後俺は、何も話すことも出来ず、本にも集中すること出来ず、ただアホみたいに本堂の隣で虚空をぼーっと見つめていた。その様子を見て、本堂が何度か俺に話しかけようとしていたようだったが、最後まで実際に話しかけてくることはなかった。

何と言うか……。まるで、心に空白が出来たみたいだな。けど、それはさつき出来たものじゃない。本当は少し前からあったけど、見ていなかった、見辛かったと言う事だけで、前々から存在していた。それが、今はつきりとした輪郭を持っただけだ。そしてその空白は、俺を良い感じに無気力にさせているようだった。

別に、期待してたわけじゃない。そもそも、どんなものを期待すれば良いかも分からなかったが、何故か水寺さんのあの言葉は、確実に俺の何かを貫いていた。そうじゃないと、こんな風にはならないただろう。そしてそれは確実な空白となり、俺を無気力にさせている。

馬鹿馬鹿しい、そう思いつつも、心は未だに上手く復帰しない。そんな自分がどんどん嫌になっていくのが心を通じてよく分かるが、だからと言ってどうにかなるわけでもない。自然回復を待つしかないだろう。

「……藤川君、帰らないの？」

「ん、ああ。帰るよ。暗くなったら危ないからな」

既に立ち上がっていた本堂にそう声をかけられ、俺はようやく腰を上げることにした。全く、まるでそこだけ重力が倍になってるみたいだ。心は体に影響すると言うが、やっぱ本当みたいだな。

水寺さんも帰宅するようで、本堂の近くでいつもの表情、とても

自然な笑みで佇んでいた。やはり、今はそれを見るのは少し辛い、それに惹かれてしまっている俺が居るのも事実だ。我ながら呆れてしまう。

けど、俺は水寺さんが好きでここに通ってるわけではない。それはさっきも言っただろう。それとは違う別の何かで、俺はここに来ているのだ。だから、望みがないと確定したところで、俺がここに通わなくなる理由になんてならないし、その笑みに惹かれなくなる理由にもならないわけだ。俺だって、そこまで馬鹿じゃない。

心に空白が出来たとは言え、きつと一時的だろう。結局はいつも通り通い続けるわけだし、あまり気にしない方が良いはずだ。いつまでもこうしてるのも、アホらしい。

「じゃあ、そろそろ帰りましょうか」

「そうね。二人とも、足元には気を付けてね」

それはこっちの台詞……と思ったが、水寺さんはここにはかなり通い慣れているので、何もおかしいことはなかった。まあ、俺も一カ月近く通い続けてるけどな。本堂はまだ二回だが。

と言っても、歩きにくいとは言え本格的な山に比べれば全然可愛いものだろう。余程運動音痴ではない限り、それ程の危険はない筈だ。無論、注意することに越したことはないけどな。

その後、三人で仄かに明るい山道を抜けると、茜色に照らされる民家が目に映えた。道も夕日に染まり、美しいとはまた違う、何とも言えない雰囲気漂わせている。普段、こう言う光景にはあまり何かを感じることはないが、今日ばかりは妙にその光景に目を奪われてしまう。何だろう、心が癒しても求めているのだろうか……。

「それじゃあ、私はこっちだから。じゃあね、二人とも」

「はい、さようなら」

「あ、さよならー」

そうこうしている間に、水寺さんが俺達が進むとは逆の道へと行ってしまった。よって、俺と本堂の二人きりになってしまう。これは、気まずいと言うか、何と言うか。話し掛けて良いのか駄目なの

か把握し辛いな。

けど、結局はお互い何も言わず歩きだしてしまった。向こうは俺の歩くスピードに合わせることをだけを集中してるかのごとく、何も話しかけてこない。楽と言えば楽だが、これでこれで虚しかった。しばらくそのまま歩いてみると、ふと本堂が立ち止ってしまった。振り向いてみると、何故か俺のことを妙に仰々しい目で見つめてきている。まあ、夕日の逆光で良く見えてないけどな。雰囲気で察しただけだ。

「……藤川君」

「お、おう。どうした？」

「もし良かったら、少し話しをして良いかしら？」

「は？いや、まあ、良いけどさ」

何だか、妙な気迫だった。話しと言っても、本堂の言うそれは世間話とか雑談とか言うカテゴリーには分類しそうな雰囲気では到底なく、どちらかと言うと、まるで俺の人生について語ろうかとも言う雰囲気だった。町は陽炎に揺れ、今のこの雰囲気を静かに比喻しているようだ。静かに、けれど確かな存在感で佇む本堂は、この雰囲気も相まってどこか神秘的である。

まあ、つまり何が良いたいかと言うと、とにかく普通じゃなかった。いつもの本堂とは雰囲気がかけ離れており、まるで俺を見定めているかのようなその視線は、少なくとも心地よいとは言えない。そして、気になることがもう一つ。本堂の右手には、いつの間にか一冊の本が携えられていた。こいつが時々読んでいる、ハードカバー、上製本だ。とても重厚な雰囲気を醸し出しており、とてもじゃないが、読書が苦手な奴に渡せばコンマ一秒で突き返されそうな代物だった。そして、それは本当にいつの間にかであり、どこから取り出したかも分からない。まるで、最初から持っていたかのようにそこに存在していた。

「えっ……と……。本堂、だよな？」

「そうよ。それとも、私以外の私に見えてたりするの？」

「無駄に難解な返しじゃがって……。いや、雰囲気が何となく、な」
悪いけど、今の本堂は俺が知っている本堂とは、こう、次元と言
うか根本的な何かが違っている気がする。いつもはもっと大人しく
て静かな雰囲気だが、今は静かだけどこか圧倒的な何かがあり、
場を制している。それはまるで、俺みたいな存在では本来直視して
はいけないようだった。

もし今、この本堂が巨大な翼でも生やして後光を背負っても、俺
は何の違和感も感じない気がする。それくらい、静かで、荘厳で、
圧倒的だった。うかつに話し掛けることも阻まれそうな、近づけば
押しつぶされそうなそんな彼女に、俺はどうしようもなく形容し難
い気持ちになっていく。不安でもない、感動でもない、怒りは、論
外……。

「……藤川君の言いたいことは分かるわ。じゃあ、まずは私につい
て話そうかしら？」

「えー、あ、ああ。た、頼む」

今の本堂について説明が貰えるなら、喜んでして貰おう。正直、
若干どころか大いに混乱中だ。さっきまで何ともしなかつた家への帰
路が、いきなりとんでもないシリアスモードに突入したら誰だつて
混乱するだろうけどな。え？何で俺いきなり取り調べ受けてるの？
的な。することはお話しらしいが。

「そうね。まず、私は人間じゃないわ」

「いきなり魔球を投げつけてきやがったな」

しかも、それはあまりに魔球過ぎてむしろストレートに近かった。
非日常が一周して日常になるように、100年に一回の隕石ならみ
んな驚くが、毎日落ちてたら誰も気にならないと同じなよう、あま
りのも現実味とかその他諸々がなさ過ぎて、簡単に受け止めること
が出来た。これでもし、「私は実は男なの」とか言われたら、物凄
い衝撃を受けていただろう。何となく分かると思うが、伝わって
来ていたらこれ幸いだ。

「別に、信じなくても良いわ。私はそれを無視してどんどん事実を

述べるだけだから」

「あー、いや。大丈夫だ、何となく分かる気がする。信じるかどうかはさて置くがな」

「そう。じゃあ、続きを話すわね。……まず、私は人間ではなく『集める人』と言う、人についての割には全然人とは思えない存在よ。そうねえ、ライトノベル風に言うなら『異世界人』とか『魔界の住人』とかそんなニュアンスかしら。見た目は人間、頭脳も人間、だけど、その存在は人間と言う存在にはカテゴラズしない。何とも言えない存在よ」

「……えつ、と。つまり、あれか。空から落ちてきた少女とかに良く付加されてる設定みたいなの」

「そうそう、実はその子の正体は〜みたいな感じよ。大概人間じゃないでしょ？」

なるほど。全く分からん。いや、分かるけど分かったら駄目みたいな……。いや、その、言いたいことは残念ながら凄く分かるんだよ！けど、それはあくまでラノベとかの世界だけの常識であって、現実での常識では決してないのだ。

だけど、ただだ。本当は心の奥で何となく受け止めている俺が居るのも事実である。別に架空と現実の区別がついていないわけではなく、どうもこの雰囲気でこれを聞くと、真実味が何割増しにもなって頭を揺するのだ。しかも相手は真面目一筋17年と言った強者、本堂 語だ。どうしたって嘘を吐いているとは思えないわけだ。……。

「おかしいな。俺、いつの間にラノベの主人公に……。いや、この発想は危ないな」

「あら、あながち間違いではないと思うわよ？」

「は？どう言う意味だよ」

「だから言っただけじゃない。あの時、私が放課後に何て言っただか覚えてないの？」

そう言われて、俺は記憶の引き出しの浅い箇所を漁ってみる。そ

して、探し物はすぐに見つかった。そりゃそうだ、最近にも最近なことなんだ。えっと、そうそう、本堂は確かこう言っていた。

——藤川君。あなたの物語を、集めさせてくれないかしら？

多分、これのことを言っているのだろう。あの時は良く意味が分からなかったが、今なら全く意味が分からない。そう、つまり今でも意味不明だ。残念なお頭をしているようで、俺は俺が心配だな。

「思い出した？つまり、そう言う事よ」

「あー、なるほどな。すいません、さっぱり分かりません」

「ええ、でしょうね」

「おいコラ」

だったら何で思い出させたんだ。もしかしたら、からかわれているのだろうか。それにしても、あまりにも空気が重たい。確かに、冗談の一つでも混ぜないと押し潰されそうではあるが、少々場違い過ぎないだろうか。ウェイトに富んだ会話をこんな雰囲気でしたら、物凄い浮きそうなくらいだ。で、その中心に居るのが本堂。曰く、人間ではないらしい。

「あの、さ。そろそろ詳しく話して貰えると助かるんだが……」

「分かってるわよ。それじゃあ、そろそろ本題に入りましょうか」

そう言うと、本堂は徐に例のハードカバー本を広げ、その場に厳かに佇んだ。その瞬間、空気が凜と張りつめ、何とも言えない神秘的な雰囲気、更にその場を支配しだしたことを肌で感じた。

——そして、俺は、本堂の言う「人間ではない」と言う言葉の意味を、心の底から理解した。

——この世のものとは思えない、その光景によって。

第九話　とある文学少女について（前書き）

これは決して、非日常ではない。けれど、日常でもない

日常と非日常の狭間が、彼女の存在

第九話とある文学少女について

その光景をどう描写すれば良いのか、俺には分からなかった。

淡々と比喻表現を使って書き連ねることも出来ない、自分の持つ知識をフルに活用しても、出来ない、ましてや、擬音などもつての外。あらゆる手段を用いても、その光景を正確に無比には伝えられない気がした。

もしあえて言うとするなら、とてもシンプルな表現になる。見たままのことを、書くしかない。けれど、それでは断片的にしか伝わらないし、正確ではない。それでも伝えたいと思うので、ここに書く。

本のページらしきものが、静かに空に浮いていた。あと、何か周囲が淡く光っている。

……以上だ。

悪いが、これで限界である。これ以上のことを伝えようとするなら、俺ではなくどなたか文豪でも呼んできてほしい。俺には荷が重いし、無理難題と言うものだ。とにかく、伝えられることは伝えたいので良いだろう。

しかしまあ、随分と非現実な光景だ。何だこれ？どつかのアニメのワンシーンか？いや、ここは三次元だ、そんな訳がない。意味が分からない。いみがわからない。イミガワカラナイ……って、危ない。思考がストップしかけた。

とりあえず、俺はその騒ぎ……じゃないな。何だ？空に浮くペー
ジの中心点でも言うのか、とにかくこの光景を作り出した張本人を見据えた。黒い髪、地味だが良く見ると整った顔立ち、眼鏡、三つ編み。まるで文学少女を絵に描いたようなそいつは、本堂 語。人では なく、集める人と言う、別の何かである者。いや、どう見た

って人間だが、彼女が言うには、その分類からには爪弾きにされているようだ。これはこれで意味が分からない。

常識を逸したその光景や本堂の正体。思考は追い付かないどころか追いかけることさえ放棄している気がした。考えるな、感じろと言う事か。いや、違う。考えられない、感じられない。何もかもが分からなかった。

「あー、藤川君？その、大丈夫？何か今にも昇天しそうだけど」

「……いや、その。もう、意味が、分からないんだが」

「でしょうね。けど、大丈夫。ちゃんと順を追って説明するわ」

説明……。説明って。この非現実で非常識で非重力（空浮いてるし）な光景をどう説明すると言うのか。ああ、けど、これの主は本堂だもんな。むしろ、本人が説明出来なくてどうするんだって話だ。それでも、出来るとは思えないけど。

ちなみに、ふと本堂の手元を見れば、一冊の本がそこにはあった。あの、どこからともなく取り出した謎のハードカバーだ。うん、光ってる。すげえ光ってる。恐らく、あのページはこの本のものだろう。と言うか、一瞬凄いい光で良く見えなかったんだが、ちょっとだけこの本からページが飛び出したところを見た気がする。もしかしたら、気のせいかもしれないが。

「何と言うか、翼でも生えてきそうだな。今のお前は」

「あら？良く分かったわね」

「マジかよ……」

「そうね、説明する前の余興よ。ほら」

ほら。そんな軽い言葉の後に、本堂の背中から翼が産声をあげた。いや、違う。周囲のページが、本堂の背中に集まったのだ。そして、そのまま幻想的な翼を構成させる。と言うか、どう考えても浮いていた枚数と今の翼を構成してるページの枚数が合致してない気がするが、そんなことは些細な事情だろう。その圧倒的幻想は、それくらいに美しく、神秘的だった。

……まるで、天使だな。

「どう？そろそろ私が普通の人間じゃないって理解してくれたかしら？」

「そうだな。嫌って程理解したよ。嫌って程な」

「あら、ちよつとやり過ぎたみたいね……。後で反省しておくわ」

「今しないのかよ」

「だって、今したら説明に支障が出るでしょ？」

そう言うもんなのか。まあ良いや。兎にも角にも、本堂が普通じゃないってのは良く分かった。何か、これだけだとまるで本堂が精神を壊してるようだ、違う違う。本堂は人間ではなく、集める人って言う未知なる存在ってことなのだろう。まあ、既にこれである意味ぶっ壊れてるって気もしないでもない。主に、俺の常識とか日常とかその他諸々の平穩を象徴するような物事が、な……。

本堂は翼を元のページへと戻し、再び空へと浮かばせていた。駄目だ、やっぱり量が噛みあっていない。けど、そんな常識を尋ねたところで、何の意味もないだろう。それよりも、説明を聞くことの方が今は余程大事だ。この状況を、理解するためにも、この、自分が今置かれてる状況を知るためにも、これからどうするべきなのかを、知るためにも……。俺はもう、非日常と言う名の扉の取っ手を、完全に握っているのだ。

「じゃあ、全て説明するわね。準備は良い？」

本堂が、ジツと俺の眼を見つめる。俺はしばらくの沈黙の後、静かにこう答えた。

「……ああ、頼む」

——こうして、扉は開かれた。

「じゃあまず、集める人について説明しようかしら」

「そうだな。人間じゃないってのは分かったが、具体的には何者なんだよ」

「そうね……。集める人は、謂わば種族よ。人間と言う種族や民族

的種族、動物もそう。ファンタジーなら、エルフとか、ドワーフとか。そう言う、集団的“個”を示すものね。だから、集める人は私だけじゃないのよ。私以外にも、集める人は居る。

じゃあ、集める人は一体なにをするのか。どんな種族なのかと言う話しなのだけど、これは簡単に言っと、文字通り“何かを集めること、集団”よ。そうね、私なら物語を集めている。他にはそうねえ……。影とか宝石とか。そうそう、時間と言うのもあったわ。そう言う、概念的要素でも集めることが出来るのが、特徴ね。普通だったら無理でしょ？物語とか、影とか、時間を集めるなんて。だからこそ、私たちは人間と言う種族での集める人と言う“個”じゃない。集める人と言う、人間ではない別の種族。集団としての“個”なの。どう、ここまででは理解出来た？」

「あー、つまり。集める人は新人類とか宇宙人とかそう言う類みたいなもので、その名の通り何かを“集める”が目的ってことか」

「凄く的確だけど妙に納得出来ないものがあるわね……。でも、まあ、そんな感じよ」

どうやら、若干不評ながらも大体あっていたらしい。やはり、宇宙人は言い過ぎたか……。けれど、こっちからすればそれと同じかそれ以上のレベルの話なのだ。何と言うか、ここまで散々非常識な光景を見たくせに、未だに信じられないくらいに、だ。俺の目の前に居るこいつは、どう見たってそこら辺に居る女子高生だし、人間ですと言われても、違和感は全くない。感じる方がおかしい。浮いているこのページも、あの翼も、幻だったんじゃないかと思ってしまう。

けど、勿論それは現実だ。目をしっかり開けて真っ直ぐ見れば、その光景はしっかり俺の目に焼き付いてくる。まるで、「これが現実だ」と言わんばかりに、それは存在している。そして、その中心にいる本堂は、実に人間らしく、とても人間とは思えない。非常に、矛盾に満ちている。

「まあ、集める人の説明はこれくらいで良いかしらね。あまり深く

説明しても、しょうがないわ。とりあえず、今のことさえ分かってくれば良い」

「了解。で、次は何を教えてください？俺的には、無駄に非常識をアピールしてるこの光景について知りたいんだが」

「ああ、これは私が今までに集めた“物語”を取り出してるだけよ。別にこんなことする必要はないけど、こうした方が非現実味が沸くでしょ？」

「へー、そうなのか。……って、ちょっと待て。これ一つ一つが集めた物語！？」

俺は、改めてそのページたちをジッと眺めてみる。すると、確かに何か書かれていた。けど、その文字は上手く読めず、何故かぼやけている。不思議なのは、ぼやけているのは文字だけなのだ。他のものはくつきり輪郭を持っているのに、その文字だけは視力が下がったのように認識出来ない。しかも、少しでも気を抜くとそのぼやけた輪郭さえ消えてしまうのだ。

「言うておくけど、ここに書いてあることは藤川君には読めないわ。私と、この物語を紡いだ人にしか見えないの」

「なるほど。しかし、この1ページにその人の物語とやらが詰まってるのか」

「違うわよ。これはあくまで目次。その証拠に――」

そう言うて本堂がページに触れる。すると、まるで分身するかのようページが増えていった。噴水の如く溢れては、空中を舞う。そして、再び 虚空に留まった。たった一枚のページはいつの間にか短編小説一つ分くらいの量になっており、本堂の言葉の意味も理解する。それと同時に、あの翼の件も理解出来た。成程、翼になる時はこうやって元の量に戻ってたのか。いや、理由は分かってもありえないことなんだがな。

「これら全部が、お前が集めた物語の目次、か……。そう言えば、何でお前は物語を集めてるんだ？」

「それに関して、とてもプライベートに話しになるわ。それに、

それを知ってどうするの？どうせ、あーそうなんだと思うだけでしょ？」

「な、何か悪かった……」

別に怒られたわけでもなさそうだが、つい謝ってしまった。確かに、今俺が知るべきなのはそんなことじゃないな。本堂のことを知ったって、しょうがない。俺は今、俺自身のことを知らなければいけないのだ。それ以外のことは、本堂も答えるつもりはないだろう。「別に良いわ。じゃあ、次は藤川君、あなたのことよ。そうね、質問形式で答えましょうか」

「あー、じゃあ、今の俺の状況って何だ？実はすげえピンチだったりするのか？」

「そんなことはないわよ。命に危機はないわ。けれど、あなたには選択が迫られてる。それは凄く重要なことかもしれないし、そんなことは全くないのかもしれないけど、確かにあなたは一つを選択をしなきゃいけない。それだけは覚えておいて」

「あんまし穏やかじゃないな……。じゃあ、次の質問。水寺さんは、関係あるのか？」

と、その質問で、本堂の顔つきが急に変わった。まさしく、その話しがしたかったとでも言うような、さあこれからが本題ね、とでも言うような、そんな表情だった。どうやら、この質問はかなり重要なものだったらしい。心して聞くとしよう。俺は、選択の件についてを頭に叩き込んだ後、本堂の話しに集中することにした。

「そうね、水寺さんは大いに関係あるわ。むしろ、切っても切れ離せない関係。かしら」

「そこまでかよ。何でそんな……」

「何で、ね。その答えは簡単よ。言っただじゃない、あなたと水寺さんの紡ぐ物語を集めたいって」

「ああ、言っただ。けど、やっぱり良く分からんぞ」

上手く理解が出来ない俺に、本堂は呆れることも鬱陶しくすることとせず、言葉が続けてくれた。

それは、本当に単純で、けど、俺にはとても複雑でとても難解なことに思えた。

本堂は、こう言った。

——いよいよ、動き出したのよ。あなたと水寺さんの物語が。

——それは、もう、逃げるなら今のうちと言っくらいに、ね。

第十話　～ or ～（前書き）

逃げるか、進むか

限りなく平凡なその選択肢は
限りなくその少年を悩ませる

第十話　or

「逃げるって……。これまた理解し辛い言葉が出たもんだな……」
本堂のその言葉に、俺はそう自然とそう答えていた。自分でも言うのもなんだが、理解力の欠片もない言葉である。

しかし、本堂はそんなことは予測済みだったようで、特に呆れも考える素振りも見せずに、こう答えてくれた。

「難しく考えないで。ただ単に、ここが物語を途中で終わらせる最後のタイミングと言うだけよ」

「……よく分かんが、それは終わらせた方が良いのか？」

「さあ、どうかしらね。ただ、ここで終わらせなかったら、後は進むしかないわよ。途中で終わらせれば、後悔しかないでしょうね」

それは……。何ともぞつとしない話だった。一度足を踏み入れたら、後戻りは出来ないと言う事か。

まあ、だからと言って、逃げるのが最善とは限らないだろう。

後戻りすれば後悔すると言うのなら、しなければ良いだけの話なのだから。

とは言っても、進んだ先に何が待ってるかは分からない。だから、どっちもどっちなのだろう。どちらも、選んでみなければ最善かそうじゃないかなんてのは判断出来ない。

——　今、ここで逃げてしまうか。

——　それとも、逃げずに進むか。

未だに話を呑み込めていない俺だが、とりあえず、選択肢だけは把握出来たようだ。

そして、俺が選ぶ選択肢は……

「逃げる、だな。悪いけど」

「あら、そう。まあ、それもそれで良いと思うわ。それが、最善な

可能性もあるでしょうし」

「ああ。だって、俺と水寺さんの物語からなんだろう？逃げるのは。あのひとの物語なんて、仮に進んでも後悔しかないさ。だったら、今ここで逃げた方が気が楽だ」

「そうね……。あなたがそう望むなら、それが一番だわ。それが、あなたの答えなのね」

「そうだよ。それが、俺の選択だ」

本当、情けないな。けど、俺にはどうしたってその選択肢しかない気がするのだから、しょうがない。大体、俺に何が出来るって言うんだ。水寺さんの心は、俺じゃなくてあの人のあるんだぞ。俺じゃなくて、彼女の視線の先に居る、その人に。

それは、俺だって何か出来るならしたい。けど、それが一体どう言うものなら良いのか分からないし、そんなものあるのかさえ疑わしい。大体、俺は俺自身の想いさえ理解してないんだ。そんな心持ちで後悔をしないようにするなんて、到底無理な話だろう。俺には、最初から逃げると言う選択肢しか与えられていない。

「分かったわ。それじゃあ、今後は彼女に会わないことね。もし会えば、後戻りは出来なくなるわよ」

「……は？いや、ちよつと待てよ。幾らなんでもそれは」

「逃げることも立派な選択肢よ。それとも、何？逃げることに何の代償がないとも思ってたのかしら？」

「——っ」

今までにないその冷たい目つきと声に、俺は思わず声を出すことも出来なかった。言い返す言葉もない。

そりゃそうだ。良く理解していないが、水寺さんとの物語から逃げると言う事は、もう水寺さんとは関わらないと言う事と同じ事なのだろう。逃げることで、覚悟が必要なのだ。逃げると言う事は、それから完全に背を向けると言う事。振り返らないと言う事は、背中に目玉は付いていないんだ、もう見ることもさえ出来なくなるだろう。それを受入れたうえで、逃げると言う選択肢を取らなければ

いけないのだ。

「どうやら、迷ったようね。さあ、どうするの？逃げるの？逃げないの？言っておくけど、中間はないわよ」

「分かつてる……。けど、ちょっと待ってくれ……」

「まあ、別に今ここで決めなくても良いわ。そうね、もしこのまま物語を進めるなら、明日また水寺さんの下へ行きなさい。もし逃げるなら、行かない。だから、明日までゆっくり考えると良いわ」

「……分かった。じゃあ、そうさせて貰う」

とりあえず、考える時間は貰えたようだった。一度は逃げると決心した筈なのに、どうやらそんなことは全くなかったらしい。

逃げたいけど、会いたい。けど、逃げたい。全く、何て我が侂なのだろうか。自分で自分に呆れてしまう。まさか、それほどに俺が水寺さんに執着していて、諦めているとは……。自分でも驚きだ。

「それじゃあ、私は帰るわね。じっくり考えておきなさい」

「あ、いや、ちょっと待ってくれ。最後に一つだけ質問がある」

「あら、何かしら？」

「……もし、俺が進むことを選んだら、お前はやっぱり俺の物語を、その、“集める”のか？」

「いいえ。藤川君が集めて良いと言うまでは、集めないわ。干涉もしない。でも、もし集めて良いと言うのなら、あなたの物語があなたの望むようになるよう、出来る限りの協力はするわ」

「そうか……。分かった。今日はありがとな。とんでもない悩みをくれてよ」

「ふふ、ごめんなさいね。私に興味を持たれたのが、運の尽きと思いなさい。私達は、集める前にこうやって干渉しなきゃいけないケースもあるのよ。詳しくは説明出来ないけどね」

それじゃあ、今度こそさようなら。そう言つて、本堂は黄昏に染まる住宅街へと消えて行ってしまった。

最後に見せたその悪戯な笑みを、俺の心に残して。

——あれから、数時間が経った。

時刻は10時過ぎ。俺はベッドに寝転がりながら、空ろに天井を見上げていた。

あれからずっと、本堂に言われたことばかりを考えている。帰り道も、食事中也、入浴時にも。

けど、結局結論は出ず、こうして眠る準備だけが出来てしまったわけだ。ラノベは読む気にならないし、読んでも頭に入らないだろう。とにかく、同じ思考が延々と俺の頭を駆け巡っている。

……逃げたい。

……けど、逃げたら会えなくなる。

……だけど、逃げたい。

それだけが頭をぐるぐる駆け回り、堂々巡りを繰り返す。俺はどうしたいんだと問いかけても、答えは一向に返って来ず、何もかもが分からない。

俺は、どうしたいんだ……？これ以上、水寺さんと関わりたくないのか？そんなことはないのか？

いや、違うな。関わりたくないけど、その先は見たくない。俺はただ、水寺さんと会って、話して、それで終わるだけで充分なのだ。だけど、会ってしまえばその先を見るしかないと言う。だから、悩んでいる。

「ああ、くそっ！どうすりゃ良いんだ！」

何度目か分からないその言葉で、苛立ちを露わにする。けど、そこには何の意味もない。

俺に足りないのは、きつと覚悟なんだろう。もつと覚悟があれば、その先を見ることにも躊躇いを感じない筈だ。けど、俺にはそんなものはないから、こうやって悩んでいる。きつと、杉野だったら何の躊躇いもなく先へ進めるんだろうな……。何でここで杉野が出たのか分かんが。

けど、あいつは実際にそんな奴だ。俺が持っていないモノを、あいつはたくさん持っている。だから、羨ましいと思ったり、酷い時は嫉妬したりする。それでも好かれているのは、それもあいつの才能なんだろう。

あいつも、俺みたいに悩むことなんてあるのだろうか？まあ、人間なんだし、そりやあるだろう。ただ、あいつの悩みなんて全く想像出来ないな。あえて言うなら、本堂のことか。とは言え、それは俺の思い違いかもしれないけどな。

それより俺のことだっつーの……。どうすんだよ、本当。必死で思考を巡らせてみるが、一向に答えは出ない。

——そして。

「……………良い朝だな」

時刻は、いつの間にか朝の6時半となっていた。いつの間に寝てたんだよ……。

仕方なく、学校へ行く準備を始める。顔を洗い、服を着替え、母親が既に準備していた朝食を完食し、持ち物を確認。何かもう、憎たらしい程スムーズに準備を完遂した。清々しい一日の始まりだよこん畜生。

その後、これと言って弊害なく学校へ到着。無論、登校中にも思考はフル回転だった。席に着いてもそれは相変わらずであり、そろそろのがぶつ壊れるんじゃないかと思う。あー、駄目だ。頭が痛い。答え何て出るかよ。

「あら、藤川君。おはよう」

「んー？ああ、おはよ」

抱えた頭を解放し、声の主を見れば本堂だった。いや、声聴いた時点で理解してたけど。相変わらず、今日もクールな雰囲気纏っている。けど、どこか高揚してる雰囲気でもあるな。物語が集められるかもしれないからか？

「その様子だと、まだ悩んでるようね」

「ああ、お陰様でな。頭痛いのなんの……」

「悪いことしたわね。けど、ぜひとも良い答えを出して頂戴。期待してるわ」

って言われてもな。ああ、行っちゃったよ。人事だと思って……。いや、そりゃそうか。これはあまりにも個人的過ぎる問題だ。他人が入る余地なんてない。本堂のせいで直面したとは言え、良く考えれば、いずれはぶつかったかもしれない悩みだ。いや、下手をすれば、この選択肢を与えられぬまま、後悔することになったかもしれない。今こうやって考えられる余地を与えられているだけ、マシなのかもな。だからこそ、正しい答えを導き出したい。

「……俺は、どうしたい？」

誰にも聴こえない声で、自分に問い質してみる。俺には、逃げると言う選択肢と、進むと言う選択肢を与えられている。前者は、本堂に言われなければ、与えられることがなかった選択肢だ。後者は、何も知らなかったら勝手に選んでいただろう選択肢だ。けど、今の俺が選べば、本堂の協力と言う心強いオプションが付く。けれど、結末は保証できるとは限らない。

前者を選べば、水寺さんに会えなくなる代わりに、途方もない後悔をしなくて良いかもしれない。

後者を選べば、途方もない後悔をするかもしれないが、もしかしたら、俺が望む結末を迎えるかもしれない。

けど、俺の望む結とは何なのだろうか？

例え進むにしても、道は真っ暗だ。手探りにも手探りであり、どうすれば良いかもわからない。

そんな暗闇に突っ込むくらいなら、やはり逃げた方がマシなのだろうか…？

——俺には、分からない。

ふと時計を見れば、HRを知らせるチャイムが鳴るまで、まだ時間があった。

けれど、決断をしなければいけない時間までは、もうほとんど残ってはいないようだった。

第十一話　誰そ彼の教室で（前書き）

堂々巡りの思考

その輪から抜け出すきっかけは、時間だけ

第十一話　誰そ彼の教室で

時はあつと言う間に過ぎ、放課後。

それはもう、残酷なくらいなあつと言う間だった。授業の内容や、弁当の中身なんて覚えてすらない。

ただただ、一つの悩みについてぐるぐると思考を巡らせていただけ。それ以外の行動は、最早オートに近い状態で行われていたことだろう。ほとんど無意識だ。傍から見れば、ロボットか何かに見えていたかもしれない。

しかし、そこまで必死に考えていたにも関わらず、俺は一向に決断を出せていなかった。

是か非かの選択肢の間に立ちつくし、そのまま一步も動けていない。進むことも、逃げることも出来ないままだ。ただし、このまま決断を出さなければ、強制的に逃げることとなるのだが……。どうせなら、選択したうえで逃げたい。逃げることも、立派な選択。余程の事じゃない限り、非難される筋合いはない筈だ。選んだうえの逃走なら、まだ精神的に楽な気もする。

だったら、このまま逃げることを選択してしまった方が良いのだろうか？ どうせ決まらなくて強制逃走をさせられるより、自分の意思で逃げた方が良くと言うのなら、迷うことはない筈だ。俺は、逃げることを選べば良い。

……ところがどうこい。そうは問屋が卸さない。逃げることは、水寺さんと二度と会わないと言うことだ。我が俤だが、それは嫌なのである。俺は、水寺さんにまだ会いたい。その視線の先の事実を知ったうえでも、会いたいと思っている。それは、別に粘着とか言う負の感情ではなく、純粹に「会いたい」と言う思いがあるだけだ。そう思いたい。

—— だつたら、会えば良い。

心の声が聴こえた。けど、そうはいかない。会えば、「物語」からは逃げれない。もしかしたら、とんでもない後悔に陥ってしまうかもしれない。はつきり言つて、それは怖いのだ。だから、はつきりと会いたいと言えない。

「…… どうすりゃ良いんだ」

誰も居なくなつた教室で、一人頭を抱えて呟く。もし、「物語」を進めると言うのなら、今日水寺さんに会いに行けと言われた。あの人が帰るのは大体6時頃。今は4時30分。あと、1時間半しか猶予はない。長そうで、あつと言う間の時間だ。悩んでいられる時間はもうない。

段々と、焦りが体中を駆け巡っていく。じりじりと焼き付けられるような、痺れるような奇妙な感覚。思考はどんどんと重みを持ち、頭が潰れそうになる。しかし、それをどうにかする術は俺にはなく、ただ焦りが体を支配し尽くすのを待つのみだ。意味もなく拳を握りしめたり、頭を掻いたりして、これまた意味のない苛立ちを発散する。どうしようもない奴だ。

「くそっ！」

ついに、怒号と共に机を叩きつけた。けれど、それはただ手に痛みを感じただけで、何の解決にはならない。

段々と、心の底に黒い感情が蓄積されていく気がした。あいつが、本堂が余計なことを言わなければ、こんなに悩みことはなかった。そんな言い訳がましい言葉が頭をよぎつては消える。責任転嫁も良い所だ。

これは、俺の問題。あいつは関係ない。あいつはただ、その問題を明確化しただけだ。何の罪もない。確かに言われなければ悩まなかつたかもしれないが、それはつまり、選択肢も与えられず、問題にも気付けないうたかもしれないと言う事だ。それは、何も知らないまま暗闇を進むと同じこと。もしかしたら、途方もない後悔に

ぶつかるかもしれなかった。

何も知らない、気付かないと言うことは、恐ろしい。本堂は、俺の道を照らしにくれた。お陰様で分かれ道を見つけてしまったが、それで良い。あとは、どちらに進むかだ。その先に、何かあるかは分からなくても。

いつの間にか、焦りも黒い感情も消えていた。何とか冷静になればたらしい。無論、悩みは何一つとして解決されていないが、これで少しは悩みに集中出来る。本堂が照らしてくれた、二つの道。そのどちらに進むかだ。

時間はもうない。俺は必死に最善の選択を考える。最善かどうかは進まなきゃ分からないが、予測することは自由だ。昨日からずっと考えてることだが、これしか選ぶ方法はない。芸のない頭を恨みつつ、残り少ない時の中で、何とかして答えを出そうとする。

……けど、いくら冷静になろうと、俺は俺であることに変わりはなく、結局時間だけが無駄に流れている気がした。

「……駄目だ。やっぱり無理なものは無理だろ」

「は？何が？」

「何がってお前……うおっ！！」

思わず椅子から転げ落ちるところだった。そりゃそうだ、誰も居ないと思っていたはずの教室に、いきなり杉野がご登場成されたのだ。嘆いてばかりで一切周りを見ていなかった俺は、全く気付いていなかったらしい。お陰様で、話し掛けられた瞬間盛大に驚いた。そして、驚かれた杉野の方も驚いていた。何だこれ。

「そんな驚かなくても良いだろ。前の手紙の時と良い、どんだけお前に驚かれてるんだよ俺」

「わ、悪い……。いや、その、ちょっと考え事してて」

「なるほど……？何か悩みでもあるのか」

「まあ、な」

何で悩み事と分かったのか不思議だったが、とりあえずあやふやにそう答えておいた。まあ、教室で一人頭抱えて考え事してたって

言われたら、そりゃあ悩み事と思ってもしょうがないよな。むしろ、それ以外の発想が見つからなかった。

「良かったら相談に乗るぞ？」

「いや、これは俺の問題だし。気持ちだけ受け取って置く」

「そうか。じゃあ、俺は先帰ってるな。いやあ、実は忘れ物しちゃってさ。それを取りに来てたんだよ」

そう言って、数学の問題集を見せてきた。そう言えば、宿題で必要なんだっけな。確かに、忘れたら大変だ。そして、そのまま問題集を鞆にしまい、杉野は教室を出て行った……と思ったら、途中で立ち止り、こちらを向いた。何だ？と思ったのは一瞬、俺の脳裏に強烈な既視感が過った気がした。何だこれ、どこかで見たことあるような。いや、違うな。どこかで感じたことのある「雰囲気」だ。形容出来ない、どこか現実離れした「雰囲気」。

「……なあ、藤川」

「！？お、おう？」

「お前の水寺さんを思う気持ちは、後悔を恐れる思いに潰される程度のもんなのか？」

「……………えっ」

「悩むなよ。きっと、行かなかった後悔の方が、何よりも辛いはずだからな」

「は？いや、おいっ！ちよっ、待つ、うわっ！」

教室を出て行こうとする杉野を引きとめようと立ち上がったら、椅子に足が絡まり盛大にこけた。幸い怪我はなかったが、じわりと体が痛む。無論、杉野の姿は既にそこにはなく、黄昏とグラウンドからの掛け声だけが、教室に溢れていた。

……一体、何だったんだろうか。さっきの杉野の様子は、明らかにおかしかった。何で俺の悩みを知っていたかも分からないし、雰囲気もどこがおかしかった。そして、その雰囲気はどこかで感じたことがあるような気もした。全部を見通したうえで、あえて多くは言わない。けど、突き放すわけじゃない。確かに、手を差し伸べて

いる感覚……。

「……ああ、そうか」

そこまで考えて、ようやく気付いた。なるほど、そう言う事か。

——集める人の時の本堂も、あんな感じだったんだ。

「……………」

沈黙が、場を支配する。

グラウンドの掛け声が、妙に耳に響く。

——空白。

それは、ほんの数秒だったかもしれない。

もしかしたら、数十分だったかもしれない。

そして、

カツリ、と、黄昏で満たされた教室に、乾いた音が響いた。

5時45分。

俺は、裏山に居た。

この「物語」を、「進める」ために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2702w/>

集める人

2011年12月2日19時48分発行